

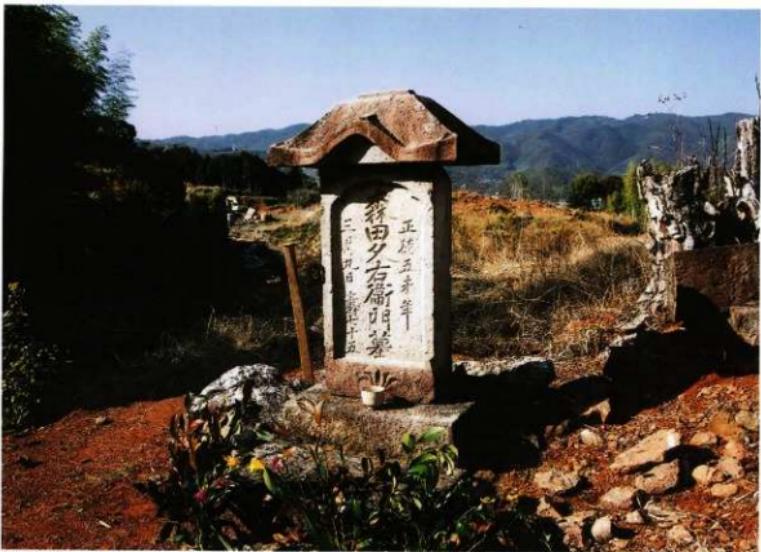
# 森田久右衛門墓所

及び小高坂山森田家墓所

—墓地改葬に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004.3

高知市教育委員会



森田久右衛門墓標



S K 9 出土遺物

## 序

小高坂山は、近世高知城下町の北西に位置する小丘陵で、一帯は近世から現代にかけて墓地山として利用され、高知市内でも有数の墓の多く集まっている地域です。そのうち、森田久右衛門墓所の所在するあたりは、土佐藩二代目藩主忠義の側室であった壽性院（通称三の丸様）の墓所が山頂付近に造営されたことから三ノ丸山と呼ばれ、特に許可を得た武家層の墓所が多く所在しています。

今回調査を行った墓の被葬者である森田久右衛門は、1653（承応2）年に開窯された尾戸焼の初代陶工として名高い人物です。尾戸窯の場所が小高坂山の東方約1kmと近かったこと也有り、19世紀に高知市西部の能茶山に窯が移転するまで、初代久右衛門以下代々の墓所として使用されてきました。

この度、三ノ丸山一帯の宅地開発により当地に所在する墓地の移転が順次行われ、森田家の墓地も移転することになりました。高知市教育委員会では、子孫の方の希望もあって、平成15年3月に行われた森田家墓所の改葬の際に考古学的な調査を併行して実施しました。墓標によって確認できた埋葬の年代は、17世紀末から19世紀初めまで約130年間にわたります。この報告書は、その成果をまとめたものです。

この報告書が、土佐における近世墓に関しての理解を深める一助となれば幸いです。最後になりましたが、調査に関わられた方々にお礼申し上げるとともに、関係諸機関のご理解とご協力に感謝申し上げます。

平成16年3月

高知市教育委員会

## 例　　言

1. 本報告書は高知県高知市三ノ丸に所在した森田久衛門墓所及び周辺に所在した森田家墓所の埋蔵文化財確認調査報告書である。
2. 確認調査は高知市教育委員会が主体として行った。また、掘削・現場管理等については白馬産業株式会社の協力を得た。
3. 確認調査は2003年3月3日を行い、3月12日に追加測量を行った。整理作業は現場終了後、2004年3月まで行った。諸記録は高知市教育委員会及び財高知県埋蔵文化財センターで保管している。出土遺物については記録・計測等を行った後、森田家に返却した。但し、遺骨以外の銭貨・煙管・陶磁器等の遺物については、後日森田家から寄贈があり、埋蔵文化財センターで保管している。
4. 確認調査にあたっては磁北をもとに任意座標を設定し、使用した。

5. 現地調査の体制は次の通りである。

調査員　田上　浩（市教委）　　測量補助員　西村謙二

また現地調査の際、（財）高知県埋蔵文化財センターから、以下の諸氏の協力を得た。

松村信博、浜田恵子、坂本憲彦、宮地啓介

6. 本書の執筆及び編集は田上・浜田（現高知市立介良潮見台小学校教諭）が共同で行った。執筆分担は第1章が田上、第2・3章が浜田である。また、整理作業・編集には上記に加えて、大賀幸子の協力を得た。
7. 出土人骨の鑑定については土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの松下孝幸氏に依頼し、玉稿を頂いた。また、出土銭貨の鑑定については泉幸代氏（須崎市立横浪小学校）に依頼した。記して感謝したい。
8. 発掘調査並びに報告書作成に当たり、高知県教育委員会及び財高知県埋蔵文化財センターの諸氏から多くの助言、教示を賜った。記して感謝したい。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地及び周囲の遺跡	
(1) 遺跡の立地	1
(2) 周囲の遺跡	3
第3節 調査の方法	5
第2章 遺構と遺物	
(1) I区の調査	6
(2) II区の調査	9
(3) III区の調査	14
第3章 考察	
第1節 近世小高坂村と森田家墓所	
1. 文献資料にみる近世小高坂村と小高坂山墓地	16
2. 森田家墓所と被葬者について	18
第2節 土佐近世墓の諸様相	
1. 県下の近世墓報告遺跡	26
2. 墓坑形態について	28
3. 副葬品について	30
付編 高知市森田久右衛門墓所出土の近世幼児骨	49

## 挿図目次

本文	Fig. 1 周辺の遺跡及び今回の調査対象地位位置図 (1/25,000)	2
	Fig. 2 調査区配置図 (1/2,500・1/500)	4
	Fig. 3 I区・II区遺構位置図	5
	Fig. 4 I区検出遺構・墓標位置図	6
	Fig. 5 SK 1・2平面・エレベーション図及び出土遺物	7
	Fig. 6 SK 3・4平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	8
	Fig. 7 SK 5平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	9
	Fig. 8 SK 6平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	10
	Fig. 9 SK 7・8平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	11
	Fig. 10 SK 9平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	13
	Fig. 11 SK 10平面・エレベーション図	14
	Fig. 12 非塔形墓標類型図	25
	Fig. 13 高知県下の近世墓	35

付編	図1 遺跡の位置	50
	図2 森田家墓所SK9(幼児)、人骨の残存部	51

## 表目次

本文	表1 遺物観察表(金属製品)	14
	表2 遺物観察表(陶磁器)	15
	表3 古銭観察表	15
	表4 小高坂山近世墓標一覧	22
	表5 近世の検出墓坑一覧	36
	表6 出土錢貨一覧	39
付編	表1 年齢区分	49
	表2 上腕骨計測値	52
	表3 大腿骨計測値	53
	表4 脊骨計測値	53
	表5 顔面頭蓋(mm、度)	56
	表6 下頬骨(mm)	56
	表7 鎌骨(mm)	57
	表8 上腕骨(mm)	57
	表9 桡骨(mm)	57
	表10 尺骨(mm)	57
	表11 大腿骨(mm)	58
	表12 脊骨(mm)	58
	表13 肋骨(mm)	58

## 写真図版目次

本文	卷頭カラー 森田久右衛門墓標、SK9出土遺物	卷頭
	PL.1 I区全景(西より)、墓標A、墓標E(前)・C(後)、墓標D、墓標B	43
	PL.2 SK4遺物出土状況、SK1六道銭・人骨出土状況	44
	PL.3 SK9甕棺出土状況(東より)、SK9出土人骨	45
	PL.4 SK4・9出土遺物	46
	PL.5 SK3・6・8出土遺物	47
	PL.6 SK1・3・6・8出土遺物	48
付編	森田家墓所SK9人骨(15歳) 四肢骨、頭蓋	59

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経過

森田久右衛門（1641～1715）は、尾戸焼の初代陶工として知られる。尾戸窯開窯（1653）にあたって、大坂高津から久野正伯が招かれ当時13歳の久右衛門が最初の弟子として師事した。また、1678年江戸に出府した際の約1年間の日記は日本の窯業資料としても価値が高く、「森田久右衛門江戸日記」として県指定文化財となっている。

この度、高知市的小高坂山において宅地造成が計画され、計画地内に森田家墓所も含まれることから、平成14年2月28日付で、高知県教育委員会に対して森田家当主から埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これに対して同年5月10日付で県教育委員会から事前の試掘確認調査が必要との回答があり、これを受けて調査を行った。調査にあたっては、森田家の子孫が所在もはっきりしているため、有縁墓地の改葬の手順の中での調査協力をお願いした。そのため、調査方法や遺物の扱い等についても通常の調査の扱いとは異なっている。調査体制は以下の通りである。

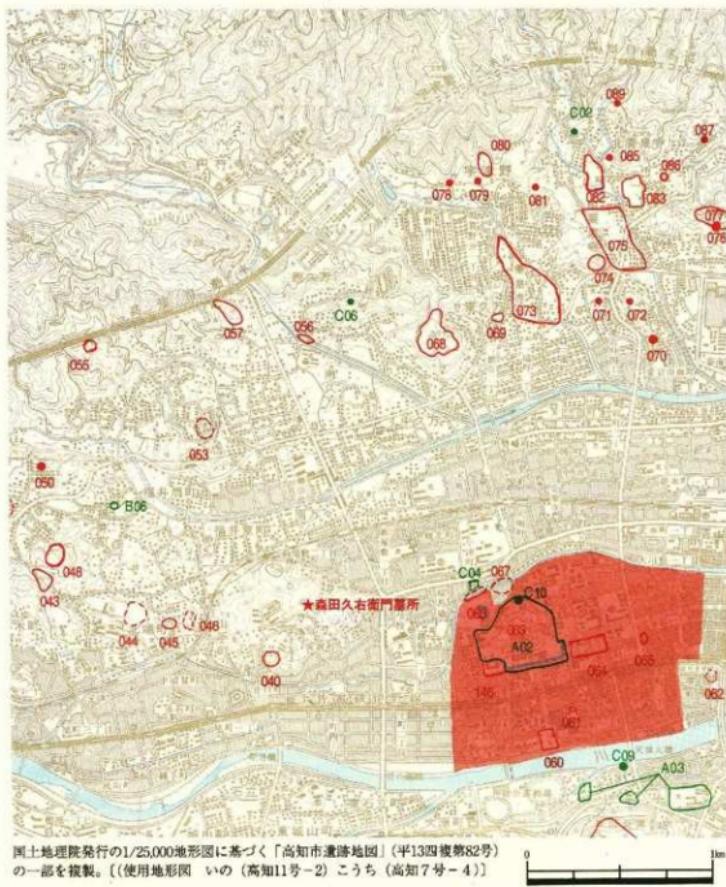
事業名	高知市内遺跡確認調査事業		
調査主体	高知市教育委員会		
	事務全般	門田麻香（同教育委員会生涯学習課主査）	
	現地調査	田上 浩（	同課指導主事）
調査協力	財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター		

## 第2節 遺跡の立地及び周囲の遺跡

### （1）遺跡の立地

高知市の中心市街地は東西にはしる断層に挟まれた中央低地上に立地しており、そこに北部の山地を源とし、低地内を東流する鏡川によって沖積平野が形成されている。

また、地質的には秩父累帯に属し、中央低地の南側の鷲尾山地北麓をはしる仏像構造線によって、四万十帯と区切られている。秩父累帯は現在の鏡川河道付近の仁淀スラストで、南帯（三宝山帯）と中帯（黒瀬川帯）に区切られる。今回の調査対象地が所在する小高坂山は黒瀬川帯に属しており、高知市西部の旭地区から東にのびて高知城が立地する大高坂山まで連なる小丘陵の一つである。この丘陵は黒瀬川構造体を特徴づける高度変成岩類を主体としており、花崗岩や蛇紋岩等を伴っている。なお、小高坂山と大高坂山との中間についてもかつて中高坂山と呼ばれる小丘が存在し、高知城築城の際に崩されたことが記録に見える。



番号	遺跡名	種別	時代
A02	高知城跡	城館跡	近世
B06	鹿持御殿跡跡	里敷跡	近世
C02	吉弘古墳	古墳	古墳
C06	桑名古墳墓	墓	近世
043	高知学園裏遺跡	散布地	弥生～古代
045	福井中城跡	城館跡	中世
048	から一と口遺跡	散布地	弥生
055	福井遺跡	散布地	縄文～中世
056	月初遺跡	散布地	弥生

番号	遺跡名	種別	時代
057	万々城跡	城館跡	中世
060	南御屋敷跡	邸跡	近世
061	中島町遺跡	散布地	古墳
063	大高坂城跡	城館跡	中世
064	弘人屋敷跡	屋敷跡	近世
067	尾戸窯跡	窯跡	近世・消滅
068	安楽寺山城跡	城館跡	中世
069	東久木池田遺跡	散布地	古代～中世
070	愛宕不動堂前古墳	古墳	古墳

番号	遺跡名	種別	時代
073	西賀茂寺遺跡	散布地	古墳
075	要鳥寺魔羅	寺院跡	古代
078	宇津野2号墳	古墳	古墳
079	宇津野1号墳	古墳	古墳
080	宇津野遺跡	散布地	縄文
082	吉弘遺跡	散布地	古代
083	松葉谷遺跡	散布地	古代～中世
086	北賀茂寺遺跡	散布地	弥生

Fig. 1 周辺の遺跡及び今回の調査対象位置図

## (2) 周囲の遺跡

高知市中心部付近において、旧石器時代の遺跡は未だ発見されていないが、縄文時代になると北部の丘陵では福井遺跡（055）や宇津野遺跡（080）等のように人類の生活した痕跡が現れるようになってくる。このうち福井遺跡では高知自動車道の建設に先立って発掘調査が行われ、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることがわかっている。

更に、弥生時代には福井遺跡や高知学園裏遺跡（043）、初月遺跡（056）、北秦泉寺遺跡（086）等丘陵沿いに遺跡が増加していく。

古墳時代にはいると、高知市指定史跡の吉弘古墳（C02）を始めとして、愛宕不動堂前古墳（070）や宇津野1号墳（079）、2号墳（078）等の後期古墳が現存する秦泉寺古墳群が山麓に点在し、ある程度の勢力を維持した豪族集団が北側の山麓に成立していたことが推定される。また古墳以外の遺跡についても中島町遺跡（061）や西秦泉寺遺跡（073）等、これまでの時代に比べて、より低地への進出がみられるようになってくる。

古代では、県内でも最古級の白鳳寺院である秦泉寺廃寺（075）が出現し、秦泉寺古墳群の造営に関わった集団が順調に発展を遂げていることが窺われ、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡（069）、吉弘遺跡（082）、松葉谷遺跡（083）等の遺跡が知られている。また、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて次第に南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世にはいると、通常の遺跡は福井遺跡や東久万池田遺跡、松葉谷遺跡等周辺部のものしか知らない。また、丘陵上に城郭が多く立地するようになり、福井中城跡（045）や万々城跡（057）、大高坂城跡（063・高知城跡と重なる）、安楽寺山城跡（068）等が現存している。その中でも大高坂城跡や既に消滅している国沢城跡（062）等は高知市の中心市街地に立地しており、付近の開発が進んできたことや、遺跡としては周知されていないものの一定の人口を有するようになってきたことが窺われる。それを裏付けるように、試掘調査でも中世に属すると思われる土師器片が出土することがある。また文献資料によっても中心部の開拓が進んできたことが窺える。

近世にはいると、先に述べた大高坂山において高知城（大高坂城）の築城並びに城下町の建設が長宗我部氏によって開始される。その後長宗我部氏の方針転換によって瀬戸に城下町が移されたため一時の中断はあったものの、関ヶ原の戦い後土佐に入国した山内氏によって城下町の建設が再開され、以後土佐一国の中心として現在に至る。

これまで概観してきたように、今回の調査対象地である小高坂山の周辺では、北側の山麓より徐々に開発が進められ、中世にはある程度の人口が周囲に存在していたものと推定される。従って、小高坂山における墓地の造営が中世以前から行われていた可能性はあるものの、やはり近世城下町の成立以降の人口増によって、墓地に対する需要が高まつた後に本格的な造営が始まったと考えるのが自然であろう。

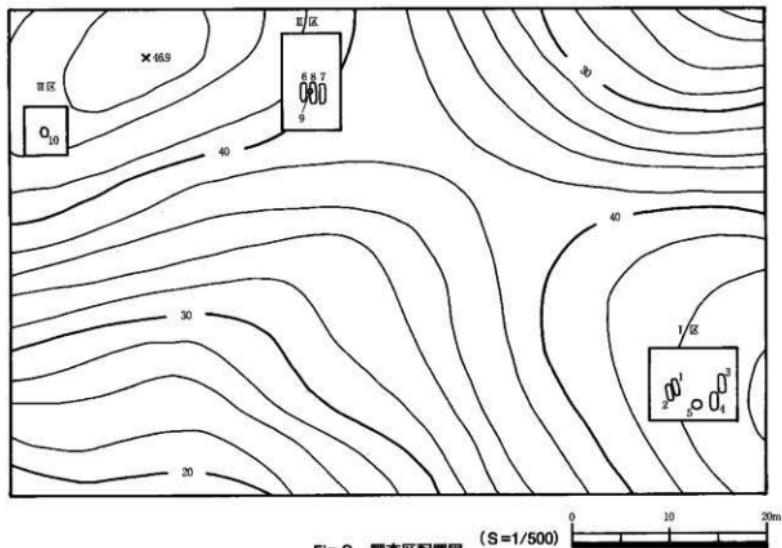
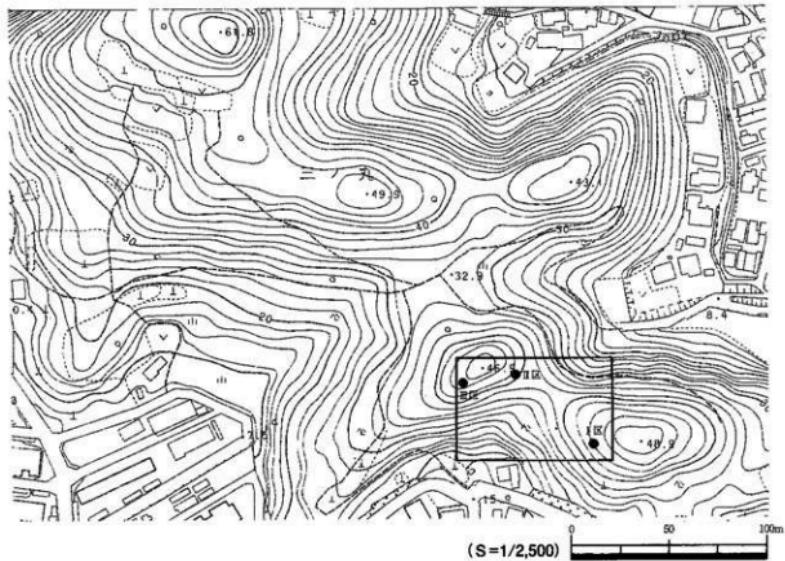


Fig. 2 調査区配置図

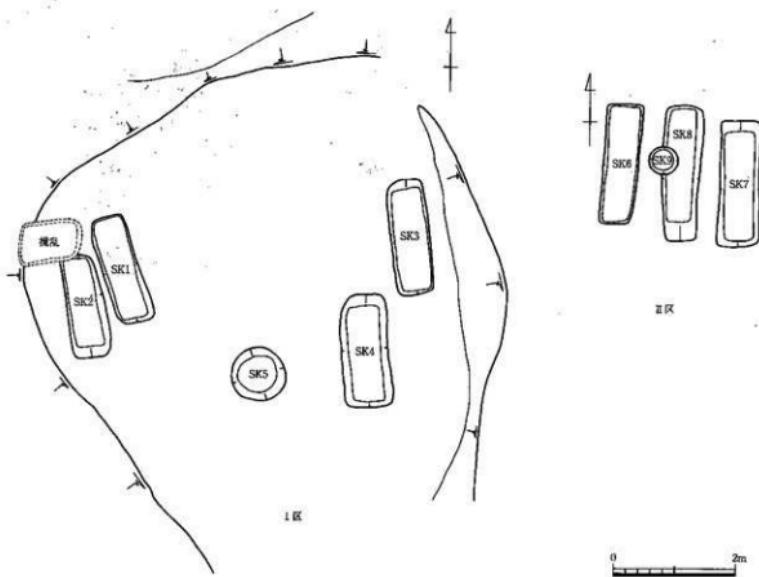


Fig. 3 I区・II区遺構位置図 ( $S=1/80$ )

### 第3節 調査の方法

#### (1) 調査の手順

今回の調査対象は有縁墓地の改葬であり、周辺では宅地造成工事に伴う他の改葬が順次行われていたため、その手順や日程を尊重し必要に応じて測量等を行うという形をとった。また、県教育委員会からの調査指示は初代森田久右衛門の墓所のみであったが、同日に他の森田家墓所の改葬も行われ、森田家御子孫や工事主体の白馬産業の承諾を得られたため墓所全てについて調査を行った。そのため一族の埋葬形態について一括した資料が得られ、より資料価値の高い調査が実施できたと考える。

調査した墓壙が多く、また時間の限られた確認調査であったため、掘削は墓壙側壁を破壊しないよう注意しながら機械掘削を中心にして行い、必要に応じて人力を併用した。また遺物出土状況図や平面図・断面図等を作成した。また、出土遺物については移転後の墓所へ安置する前に、実測・鑑定等を行うことについて森田家側の快諾が得られたため、一時借用し持ち帰って必要な調査を行った後返却した。

#### (2) 調査区の設定及び基準点

各墓壙は大きく3箇所に分かれて存在していたため、最も南に位置する初代森田久右衛門墓所付近を調査I区、中央に位置する4代森田弥源次墓所付近を調査II区、最も西に位置する森田源兵衛墓所を調査III区とした。測量基準点は各調査区ごとに設定し、各墓壙ごとの実測基準点は任意座標を用いて平板測量で記録した。また、各調査区の位置関係は後日トータルステーションを用いて測量した。

## 第2章 遺構と遺物

### (1) I区の調査

調査I区では、5基の墓坑を検出した。この墓域上面では

墓標A - 正徳五年（1715）森田久右衛門

墓標B - 延宝八年（1680）被葬者不明

墓標C - 寛保四年（1744）森田八丞光政

墓標D - 寛保三年（1743）森田八之丞妻

墓標E - 被葬者不明

の5基の墓標と、F - 上部墓標を損失したとみられる墓石基部1基、G - 石積み1基が上面にて確認されている。しかしながら、上部構造である墓標と地下構造との対応関係が推察できるものは墓標AとSK1、墓標GとSK2、墓標CとSK3、墓標DとSK4のみであり、その他については墓標の移動や消失によって対応関係が明らかでない。

各墓標は墓標A～Dが砂岩製、墓標Eが花崗岩製であり、墓標Aが非塔形墓標分類（Fig.12）のD型、墓標B・EがA型、墓標C・DがB型である。

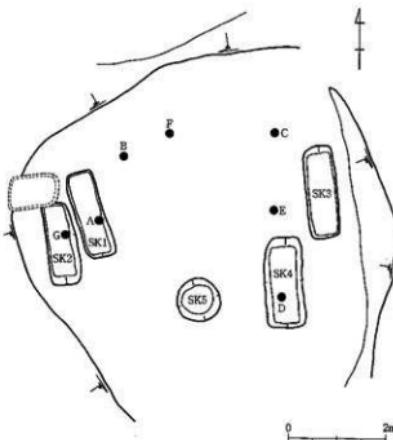


Fig.4 I区検出遺構・墓標位置図

#### SK1 (Fig.5)

調査I区の北西部に位置する墓坑で西側にSK2が並列する。墓坑上面には「正徳五未年 森田久右衛門墓 三月九日□七十五」銘の石製墓標を伴う。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し笠部を有する。

墓坑は軸方向N-0°-E。平面形は長方形を呈し長軸180×短軸60cm、深さは173cmを測る。底部は長軸180×短軸55cm。床面はほぼ平坦である。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含む。

木棺片は残存しないが床面壁際から釘数点が出土しており、内部主体は箱形木棺とみられる。床面からは人骨が少量出土している。副葬遺物は床面北寄りから出土した寛永通寶6枚である。錢貨は6枚重ねであり、外部には布痕跡を残している。図示したものは寛永通寶（1～6）であり、1・2は新寛永、3～6が古寛永である。

#### SK2 (Fig.5)

調査I区の北西端に位置する墓坑で、東側にSK1が並列する。墓坑上面には石積みを伴う。

墓坑は軸方向N-11°-E。平面形は長方形を呈し、長軸174×短軸60cm、深さは146cmを測る。底部は長軸144×短軸46cm。床面はほぼ平坦である。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含んでいる。木棺片、人骨、副葬遺物とも未確認である。

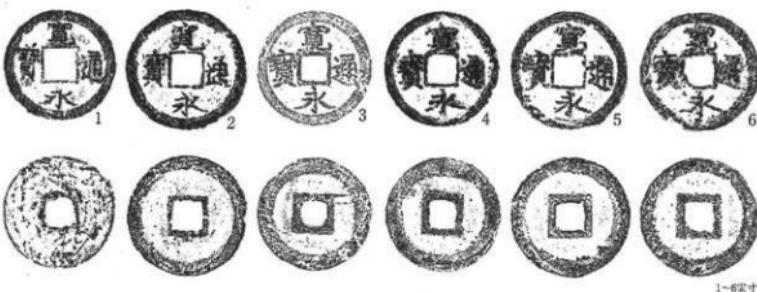
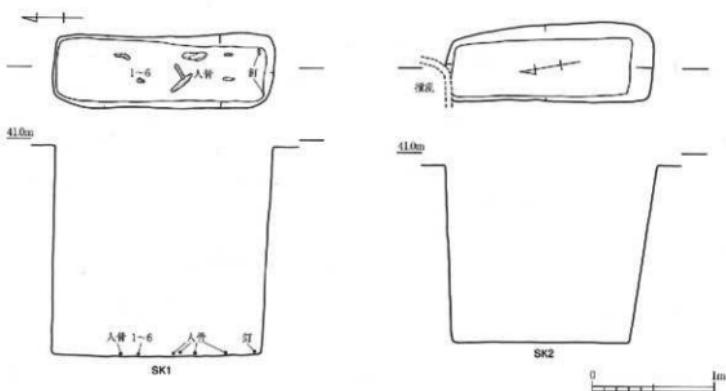


Fig. 5 SK 1・2 平面・エレベーション図及び出土遺物 (1~6 : SK 1)

### SK 3 (Fig. 6)

調査 I 区の北東部に位置する。墓坑上面には「寛保四申子年 森田八丞光政墓 正月□日行年七十一歳」銘の石製墓標を伴う。墓標は砂岩製で、塔身が方柱形を呈し、頭部は弧状となる。

墓坑は軸方向 N-12°-E。平面形は長方形を呈し、規模は長軸 190 × 短軸 63cm、深さ 145cm を測る。底部は長軸 170 × 短軸 50cm である。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含む。

内部主体は箱形木棺とみられ、床面からは鉄釘数点と人骨が出土している。副葬遺物は床面北側から出土した 6 枚重ねの寛永通寶、煙管雁首と吸口である。

図示したものは寛永通寶（新寛永: 14・16・18、古寛永: 15・17・19）、煙管雁首（12）、煙管吸口（13）、鉄釘（8）である。煙管は 12・13 ともにラウが残存する。8 は鉄製の角釘とみられ、頭部は半円形を呈する。8 は先端部を欠損する。

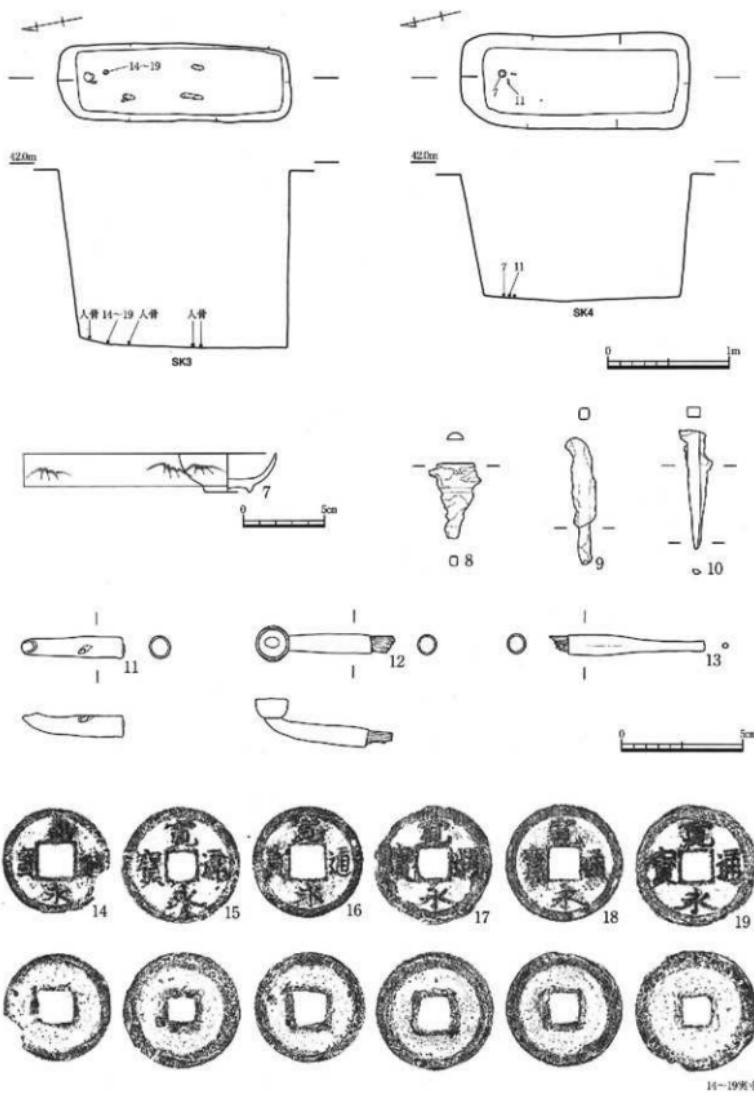


Fig. 6 SK3・4平面・エレベーション図及び出土遺物実測図  
(8・12~19: SK3, 7・9~11: SK4)

#### S K 4 (Fig.6)

調査I区の南西部に位置する墓坑で、北東側にSK3が近接する。墓坑上面には「寛保三癸亥年宮近口女 森田八之丞妻墓 閏四月廿八日行年四十四歳」銘の石製墓標を伴う。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し、頭部は弧状をなす。

墓坑は軸方向N-15°-E。平面形は長方形を呈し長軸190×短軸63cm、深さ72cm、底部は長軸158×短軸50cmを測る。埋土は明赤褐色粘質土で角礫を多量に含む。

床面壁際からは鉄釘数点が出土しており、内部主体は箱形木棺とみられる。副葬遺物は床面北側から出土した染付小杯、煙管雁首と吸口であり、煙管吸口は外部に布痕跡を残す。図示したものは染付小杯(7)、煙管雁首(11)、鉄釘(9・10)である。7は肥前産の丸形小杯で、外面に筆文を描く。呉須は青色に発色し透明釉は僅かに青色を帯びる。煙管雁首(11)は火皿を欠損する。吸口は破損が著しく圓化不能であった。10は鉄製の角釘で、四角形の頭部をもち全長は4.8cmを測る。9も角釘であるが、先端部を欠損する。長さは5cm前後とみられる。

#### S K 5 (Fig.7)

調査I区の中央部に位置する墓坑で、上面には墓標を伴わない。平面形は円形を呈し、規模は径88×90cm、深さ172cm。底部は平坦で径60×65cmを測る。埋土はにぶい赤褐色粘質土で角礫を多量に含んでいる。

内部主体は早桶等の桶状木棺とみられ、床面壁際からは鉄釘数点が出土している。

副葬品は未確認である。図示したものは鉄釘(20)である。20は鋸が著しく体部形態は不明である。釘全長は5.7cmを測る。

#### (2) II区の調査

調査II区では山の東斜面に墓域が展開しており、SK6～9の4基の墓坑を検出した。この墓域では最下段にあたる東端部にて墓標H-森田弥源次(没年1803)と同妻(没年1809)の墓標、その西側にて墓標I-正徳元年(1711)森田久右衛門娘龜の墓標が確認されている。このうち、墓標と検出墓坑との対応関係が特定できるものは夫婦墓である墓標HとSK7・8であり、墓標Iについては元の埋葬地点から移動された可能性があり検出墓坑との対応関係は明らかでない。

各墓標はいずれも砂岩製であり、墓標Hが非塔形墓標分類(Fig.12)のB型、墓標IがA型である。

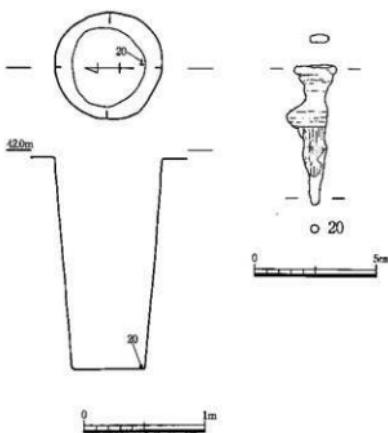


Fig.7 SK5 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

### S K 6 (Fig. 8)

調査II区の西端に位置する。墓坑上面付近には「正徳元辛卯年十二月十日 森田久衛門娘龜墓戒名□□□行年廿六」銘の墓標が残るが、墓標は元の埋葬地点から移動された可能性があり検出墓坑との対応関係を明らかにし難い。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し、頭部は切妻状をなす。

墓坑は軸方向N-7°-E。平面形は長方形を呈し長軸200×短軸60cm、深さは162cmを測る。底部は長軸190×短軸53cmである。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は箱形木棺とみられる。副葬遺物は床面から出土した寛永通寶6枚、煙管雁首と吸口、である。このうち寛永通寶は4枚重ねと2枚重ねの組み合せで出土したものである。又、煙管は布が付着していることから布に巻いて副葬されたものとみられる。図示したものは寛永通寶（新寛永：23～28）、煙管雁首（21）、煙管吸口（22）である。煙管は21・22ともにラウが残存する。

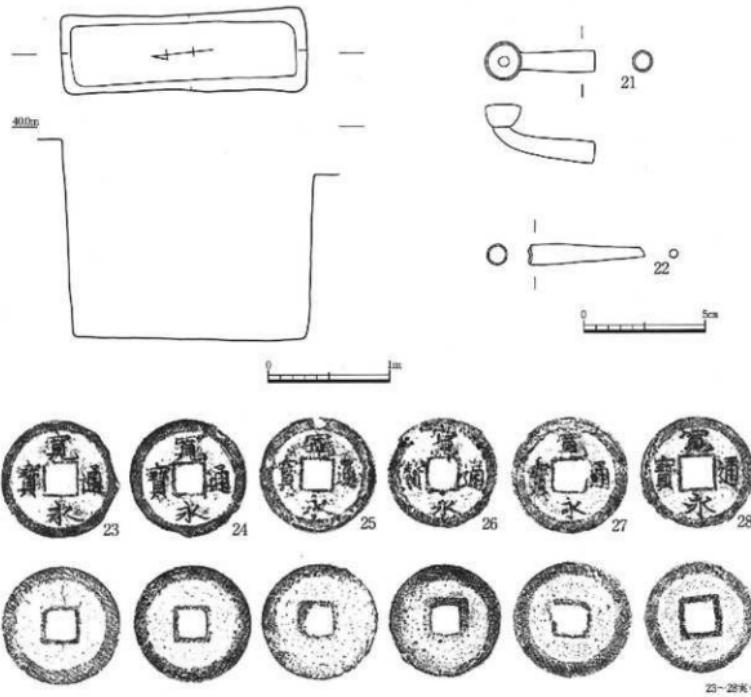


Fig. 8 SK 6 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

### SK 7 (Fig.9)

調査II区の東端に位置する。上面には「森田弥源次墓 同妻之墓」銘の墓標を伴う。墓標は砂岩製で塔身が方柱形を呈し、頭部は弧状をなす。墓坑は軸方向N-0°-E。平面形は長方形を呈し長軸約200×短軸60cm、深さ約140cmを測る。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は箱形木棺とみられるが、副葬遺物等は未確認である。

### SK 8 (Fig.9)

調査II区、SK 7の西に接する墓坑である。先の「森田弥源次墓 同妻之墓」墓標と位置関係からみて、隣接するSK 7とは夫婦墓になると思われる。墓坑は軸方向N-0°-E。平面形は長方形を呈し長軸190×短軸50cm、深さは143cmを測る。底部は長軸185×短軸44cm。床面はほぼ平坦である。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含む。

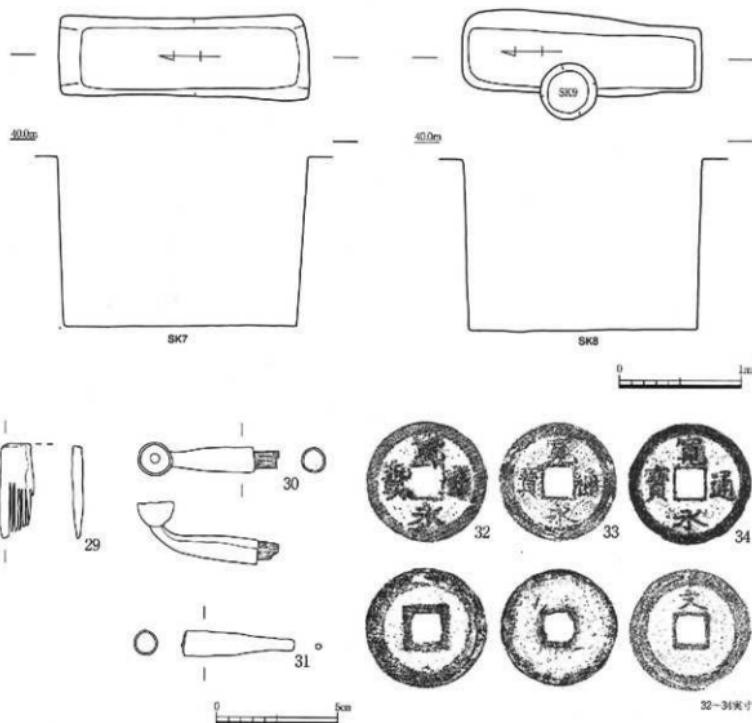


Fig.9 SK 7・8平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 (29~34: SK 8)

木棺片は残存しないが内部主体は箱形木棺とみられる。副葬遺物は床面北寄りから出土した寛永通寶3枚、煙管雁首と吸口、櫛、玉である。図示したものは寛永通寶（新寛永：32～34）、煙管雁首（30）と吸口（31）、櫛（29）である。煙管はラウが残存しており、ラウ表面には赤色の漆が施されている。

#### S K 9 (Fig.10)

調査II区に位置する小型の円形墓坑で、S K 8の西側を切っている。平面形は円形を呈し、規模は径46cm深さは46cmを測る。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は陶器製の甕棺である。甕上面は素焼きの蓋によって密閉されており、内部には火葬された幼児人骨が納められている。副葬遺物は寛永通寶4枚である。寛永通寶（新寛永）は3枚重ねと1枚の組み合せで人骨の下側から甕内底に溶着した状態で検出された。又、寛永通寶の他に、人骨間から金箔状の細片が少量検出されている。

図示したものは鉄釉陶器甕（35）、素焼き蓋（36）である。35は口径28.3cm、胴径32.5cm、底径17.4cm、器高33.6cm。胎土は灰白色（25Y8/2）で、胎土中に石英と長石の角粒粗砂を多量に、黒色細粒を少量含む。釉は暗赤褐色（5YR3/4）に発色し、内面下半無釉、外底施釉である。外面肩部には黒色の鉄釉を流し掛けする。口縁部は外方に肥厚し、口唇部は水平で浅いハケ目が残る。胴部外面には多段の沈線と1条の櫛描波状文を巡らす。肩部双方にはリング状の双耳を貼付し、強いユビオサエを施す。口唇部の9箇所に径1cm前後の円形の砂目、外底の3箇所に径5cm前後の円形の砂目が残る。なお、35は焼け歪みによって片底部側が著しく凹み、口縁部の1箇所には歪みによる亀裂が生じている。又、内底には甕内部での重ね焼きの際に生じたとみられる径8.2cmの陶器高台溶着痕が認められ、又、胴部内面片側にも灰白色（25Y7/1）の薄手の灰釉陶器細片が溶着している。蓋（36）は径28.6cm、厚さ2.1cm。胎土は浅黄色（25Y7/4）で石英と長石の角粒粗砂を多量に、2～5mm大の長石角礫と1mm前後の黒色粒を多く含む。内外面無釉で硬く焼締まっており、片面のみが褐色に発色する。タカラ成形で外面はイタナデ、部分的にユビオサエと強いイタナデが施される。個面はハケ調整である。焼け歪みによって中央部分が凹み、上面の周縁に鉄釉が僅かに掛かる。本個体は窯焼成時の焼台等の用途に使用された痕跡は無く、又、法量が甕棺口径に一致することから、専用の棺蓋として製作された可能性が高い。

なお、検出人骨の残存状態は良好であり、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏による鑑定の結果、15歳前後の幼児骨との同定結果を得ている。

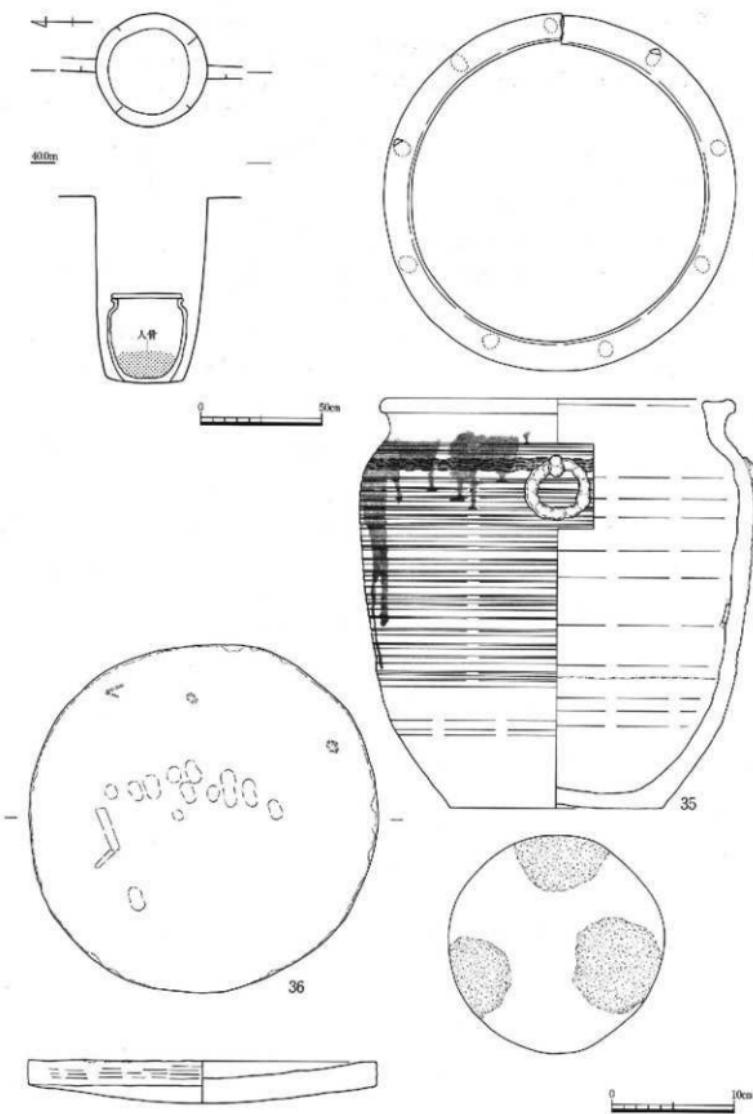


Fig.10 SK 9平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

### (3) III区の調査

調査III区では、SK10を検出した。この墓域では墓標J - 森田源兵衛光信（没年1725）が確認されている。

SK10 (Fig.11)

調査III区に位置する円形墓坑である。平面形は円形を呈し、規模は径100×72cm深さ112cmを測る。底部は径70×60cmである。埋土は褐色粘質土で角礫を少量含んでいる。

内部主体は桶状木棺とみられるが、木棺片や副葬遺物等は未確認である。

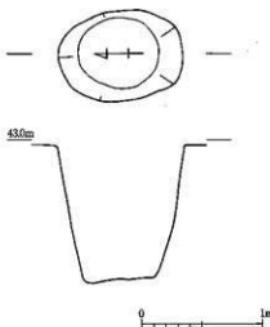


Fig.11 SK10平面・エレベーション図

表1 遺物観察表（金属製品）

辨認番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm · g)			特徴	備考
				全長	金幅	金厚		
8	SK3	鉄製品	釘	確認長 3.1	-	-	(2.7)	断面四角形。頭部は半円形を呈する。 先端部を欠損。
9	SK4	鉄製品	釘	確認長 5.2	0.5	0.4	(2.8)	断面四角形。 頭部は欠損する。
10	SK4	鉄製品	釘	4.9	0.5	0.4	2.5	断面四角形。頭部は四角形を呈する。
11	SK4	銅製品	煙管覆管	確認長 4.1	0.9	火皿径 1.5	(3.0)	断返しは緩やかに湾曲する。 火皿を欠損する。
12	SK3	銅製品	煙管吸口	4.7	0.8	火皿径 1.5	5.4	断返しは緩やかに湾曲する。
13	SK3	銅製品	煙管吸口	5.7	0.9	吸口径 0.4	2.9	吸口に向かい窄まる。側面に接合痕 あり。
20	SK5	鉄製品	釘	5.7	-	-	(2.9)	頭部は四角形を呈する。
21	SK6	銅製品	煙管吸口	4.5	0.9	火皿径 1.5	6.6	断返しは緩やかに湾曲する。 外面に布が付着。
22	SK6	銅製品	煙管吸口	4.8	0.9	吸口径 0.4	1.8	吸口に向かい窄まる。
30	SK8	銅製品	煙管吸口	4.3	1.0	火皿径 1.5	5.6	断返しは湾曲する。側面に接合痕 あり。ラウ外沿には赤色の漆を施す。
31	SK8	銅製品	煙管吸口	4.5	1.0	吸口径 0.4	4.2	吸口に向かい窄まる。

表2 遺物観察表(陶磁器)

拂岡番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)				色調・胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
7	SK4	磁器焼付	小杯	6.9	2.4	-	2.8	白色	丸形。笠文。透明釉は青色を帯びる。	肥厚。
35	SK9	陶器	甕	28.3	33.6	32.5	17.4	灰白色 25Y8/2.石英 長石の粗砂を多量に含む。	鉄船は暗赤褐色に発色。内面下半無釉。肩部に黒色の鉄船を沈し割り。輪状の双耳を貼付。外面に多段の化粧と1条の舞袖波状文。外底3箇所に砂目、口唇部9箇所に胎土日跡。	尾戸窓か。底部が著しく焼け歪み、口縁部に龜裂あり。内底に高台溶着部あり。側面部内面に灰釉陶器片が溶着。
36	SK9	素焼き	甕	全径 28.6	全厚 2.1	-	-	肉青色 25Y7/4.石英 長石の粗砂、 長石雲母を多量に含む。	タカラ成形。外面イタナデ。 部分的にビオサエ。輪面粗いハケ。	尾戸窓か。

表3 古銭観察表

拂岡番号	出土地点	銭種	分類	外径(mm)	中径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考・初鋳年代
1	SK1	寛永通寶	新寛永	23.0	6.0	1.0	3.12	四天王寺・寛永5年(1708)
2	SK1	寛永通寶	新寛永	24.5	6.5	1.0	3.16	不旧手銭・享保年間(1716~1735)
3	SK1	寛永通寶	古寛永	23.5	5.5	1.0	2.92	-
4	SK1	寛永通寶	古寛永	23.5	5.8	1.0	3.07	木戸窓か
5	SK1	寛永通寶	古寛永	24.2	5.9	1.0	3.53	岡山城・寛永13年(1636)
6	SK1	寛永通寶	古寛永	24.2	6.0	1.1	3.97	-
14	SK3	寛永通寶	新寛永	22.0	6.8	0.9	1.85	-
15	SK3	寛永通寶	古寛永	24.0	5.5	1.0	3.27	岡山城・寛永13年(1636)
16	SK3	寛永通寶	新寛永	23.0	6.5	0.8	2.67	-
17	SK3	寛永通寶	古寛永	24.0	6.0	1.0	3.57	-
18	SK3	寛永通寶	新寛永	24.0	6.1	1.1	3.45	-
19	SK3	寛永通寶	古寛永	25.0	5.8	0.9	2.73	-
23	SK6	寛永通寶	新寛永	24.5	6.0	0.9	2.58	-
24	SK6	寛永通寶	新寛永	24.2	5.8	1.0	2.94	不旧手銭・享保年間(1716~1735)
25	SK6	寛永通寶	新寛永	23.9	5.9	1.1	2.58	-
26	SK6	寛永通寶	新寛永	22.8	5.8	0.9	2.56	-
27	SK6	寛永通寶	新寛永	24.0	6.0	1.0	2.92	-
28	SK6	寛永通寶	新寛永	22.9	6.1	0.9	2.24	-
32	SK8	寛永通寶	新寛永	25.0	6.0	1.0	3.24	-
33	SK8	寛永通寶	新寛永	24.0	6.0	1.0	2.82	-
34	SK8	寛永通寶	新寛永	25.0	5.8	1.1	3.48	文鏡・寛文8年(1668)
-	SK9	寛永通寶	新寛永	約25	約6	約1	3枚で 10.30	-
-	SK9	寛永通寶	新寛永	測定不能	*	*	*	-
-	SK9	寛永通寶	新寛永	測定不能	*	*	*	鉄錢・明和4年(1767)
-	SK9	寛永通寶	観察不能	測定不能	*	*	2.99	-

## 第3章 考察

### 第1節 近世小高坂村と森田家墓所

#### 1. 文献資料にみる近世小高坂村と小高坂山墓地

##### (1) 小高坂村

近世の小高坂村は、高知城下町の西側に隣接する村であり、その西部には丘陵地、小高坂山が広がる。「小高坂村」の名称はすでに天正15年（1587）『長宗我部地検帳』の「大高坂之郷地検帳」にその名が見えており、その大部分は長宗我部氏の一族と伝えられる大黒氏領であったという。近世以降の記録では、宝永年間（1704～1711）の村落の詳細を記したといわれる『土佐州郡志』に「在二府城西北一・・・・東西十町許南北十二町 其ノ土黒 戸凡テ六百二十士民雜居ス」との記載があり、武士・農民の居住地として発展した村の様子が描かれている。

城下町の発展に伴って、近世以降は小高坂村南東部の町地化が進んだ。先の『土佐州郡志』によれば、小高坂村には「越前町」「川原町」「櫻ノ馬場」と「西町」「北筒市」の地名が挙げられ、18世紀初頭頃の小高坂村において侍屋敷地、町地、農民層の集落が展開した様子が窺われる。統いて、文化12年（1815）編纂の『南路志』（註1）では、先に挙げられた「越前町」「川原町」「櫻馬場」の他に、元禄5年（1692）に山内大膳亮公の侍屋敷が設けられた「大膳様町」、宝永4年（1707）以降寺院の造営が進められた「寺町」、享保21年（1736）以降から農民が移り住んだ「新屋敷」、小高坂山の丘陵部を指す「三丸」の地名が新たに加えられている。

この他に、近世の絵図にも小高坂村は江ノ口川を挟んで、郭中の西側にその村名が記されている。このうち天保12年（1841）の『城下町絵図』を見ると、村の南東部には江ノ口川沿いに東から「エチゼン町」「大膳様町」の南北の町筋が描かれ、その西に「小高坂西町」「小高坂北町」が見える。又、「エチゼン町」の北側に「寺町」、その北西に「新屋敷」の名が記されている。

これらの記録から窺われるよう、近世の小高坂村は、上級～中級武士層の居住区であった郭中に隣接するという立地環境によって、侍屋敷地、町地、寺町、集落という多様な側面をもちらながら発展を遂げた。近世城下町の形成と発展に伴って、当村はその機能を拡大していくといえよう。

##### (2) 寺町の形成

次に、小高坂村内の寺院について見てみたい。まず、『土佐州郡志』では「常通寺」「圓満寺」「宗善寺」の3寺院の名が挙げられている。一方、『南路志』では、先の真言宗「賢法山常通寺悉地院」、一向宗東派「圓満寺」、一向宗西派「宗善寺」に加えて、浄土宗「源信山淨福寺正林院」、浄土宗「智福山西念寺順正院」、浄土宗「山泉寺」、浄土宗「專修寺」、一向宗京佛光寺末「真光寺」が新たに記載されている。

これら寺院がいつ頃から当村に造営されたかが問題になるが、先の史料によれば、常通寺が寛永年間（1624～44）に石立岩戸から当地に移されたことが『土佐州郡志』に、圓満寺が寛永11年（1634）に建立されたことが『南路志』に記されている。また、宗善寺については両史料とともに建立時期が明

記されていない。この他、寛文9年（1669）の『高知城下図』には、江ノ口川西岸の櫻馬場に圓満寺、その西側の越前町横に常通寺の位置が示されている。

統いて、「南路志」によると、源信山淨福寺正林院、智福山西念寺願正院、山泉寺、專修寺、真光寺が宝永4年（1707）以降当村に移転されたとあり、西念寺については「宝永四年大変後今之寺町江引移。」との記述が残る。また同史料によれば、宝永4年の大地震の後に、越前町の北側にあたる地域に寺町の形成が進められたということであり、これについて「寛文十一年辛亥四月、伊達兵部少輔宗勝公御預り之節此所配所ニ相成、三方堀ニ而南一方出入口なり。延寶七己未十一月四日兵部公於配所卒去。其後宝永四年大地震後、今之寺町ニ成。」との記述がなされている。

したがって、小高坂山の下側に位置する宗善寺が造営時期不明であることを除けば、17世紀前半に真言宗常通寺と一向宗圓満寺の2寺院が村の南東部に設けられ、統いて18世紀初頭以降、淨土宗淨福寺、西念寺、山泉寺、專修寺、一向宗真光寺の5寺院が次々と造営され、当村に寺町を形成するに至ったということが分かる。すなわち小高坂村に寺院の造営が本格的に進められたのは近世以降からと言えるが、当村に寺院造営が進んだ背景には、城下町に接する村の立地条件も大いに関与していたとみることができるだろう。

### （3）近世墓地の形成

「三ノ丸」は、小高坂村西部の丘陵地小高坂山の北部を指す地名である。この丘陵の東側には寺町が面しており、丘陵の尾根から裾にかけて、近世から現代に至る墓地が営まれてきた。また現在丹中山と呼ばれている小高坂山の南部側にも近世墓が多く残されている。（註2）

この「三ノ丸」については「南路志」にその名称由来と墓地造営の経緯が記されているので、以下引用したい。「或云、忠義公御妾<sup>(アヤ)</sup>の姫君正蓮院心譽宗月、宝永四年八月御逝去也。山内將監殿御室ニ而、後彦作殿の御母に當也。彦作殿ハ豊昌公と從弟也。御妾を三丸殿と云へり、誰人の娘成事を不聞。三の丸殿死去、小高坂山に葬。今三の丸と云ふハ右の墓有故也、古城の三丸に非ラス。夫より前ミタ右の墓地近邊ハ乾氏の預りにて、其邊江葬る者あれハ彦作殿江付属をする也。」ここには、「三ノ丸」の名称が山内忠義の側室三丸殿の墓造営に由来することや、この墓地近辺の土地が山内家親族である乾氏の所有地であり、三ノ丸近辺の土地に墓を造営する際には彦作殿への届出が必要とされたこと等が示されている。

ここに表れる「三丸殿」は現存する墓標「寛文元年卯卯年 淳性院殿 月清玉心大姉覚位 三月初六日」銘からみて、没年は寛文元年（1661）である。したがって三ノ丸への近世墓造営は寛文元年（1661）前後には行われていたとみることができる。また三ノ丸の土地が山内家関係の所有地であったという点に関しては、今回調査の対象となった森田家墓地についても、森田家が土佐藩主の陶工を務めていたことから山内氏関連の土地への墓地造営が許されたと聞く。（註3）三ノ丸には、こうした経緯によって近世を通じ武家を主体とする墓地が営まれていったものとみられる。

最後に、今回は小高坂山墓地移転対象区の近世墓標を調査し、その造営時期の検討を行った。（表4）それによると小高坂山三ノ丸における近世墓の出現は寺町形成以前の17世紀後半からすでに認められており、寺町形成後の18世紀以降その数が急増している。（註4）先に触れた様に、三ノ丸の丘陵は

山内氏親族の所有地が存在したという理由から、ここに武家の墓地が多く営まれることとなるが、城下町の西方に近接し寺町とその周辺に展開する寺院群の西に面するという立地条件も、当墓域の拡大を促したと思われる。こうした背景をもって、小高坂山は城下町西方に面する墓域として展開し近世墓地が営まれていったのであろう。

## 2. 森田家墓所と被葬者について

森田久右衛門は土佐尾戸窯の初代陶工として、承応2年（1653）の尾戸窯開窯から正徳5年に75歳で没するまでの63年間を務め、尾戸焼の作風を確立した人である。延宝6年（1678）、久右衛門は四代藩主山内豊昌より江戸出府を命じられ、各地の窯業の視察や大名茶人の前での作陶を行っている。この延宝6年（1678）夏から翌7年夏までの各地での見聞を詳細に記録したものが『森田久右衛門日記』（註5）である。『森田久右衛門日記』は江戸初期の近世窯業の実態を伝える数少ない陶磁資料であるとともに、陶工自身が各窯業地の状況を描寫した見聞記であることから、当時の窯業実態を知る極めて信憑性の高い資料として現在高く評価されている。また久右衛門以降、近世尾戸窯の陶工を代々務めた森田家には、藩差し出しの『森田家年譜書』の他に、『戸陶役段表』『森田家系図』などの自家の古記録が残されており、当時の尾戸焼の贈答や製作品目及び藩窯陶工の活動内容等を伝える貴重な資料となっている。

そこで、以下の項では近世尾戸窯の操業経緯を紹介するとともに、森田家文書や藩記録を手掛りとして、藩窯陶工としての森田家の動向を検討しておきたい。（註6）

### （1）近世尾戸窯と森田家

土佐の藩窯である尾戸窯は、承応2年（1653）二代土佐藩主山内忠義公の命により開窯された。この年藩主から野中兼山に宛てた『忠義公書状』（註7）には、その開窯の経緯が記されている。書状中には「一、肥前焼物其元へ商人持參候て、其元にも能土有之、焼物出来候ば重宝成候、又は家中侍共下々迄も通用ニ致儀と被存、・・・」との記述がみられ、肥前陶磁の盛行や諸国での国焼新興の気運に刺激をうけ焼物の国産を狙っての開窯であったことが窺われる。又、文面からは諸公への贈答品や藩内御用品の製作の他に、家臣や民家使用の品々も焼かせたいとのねらいもあったとみられる。開窯にあたっては、大坂高津の陶工久野正伯を土佐に招き寄せて、窯を築かせ製作を行わせている。『忠義公書状』中に表れる正伯の製作品目は茶入、茶碗、花入れ、皿であり、それらは「くはんにう入仕立」のものであったらしい。

正伯の弟子には森田久右衛門と山崎平内が命じられた。兩人は正伯の元にてその技法を習得し、正伯帰坂後も両人が作陶を行った。この初期の段階の尾戸焼は「正伯焼」「正伯弟子焼」として記録上（註8）に表れている。以後、近世を通じて森田・山崎の両家が藩窯での作陶に代々従事した。製作品目は森田家が茶道具を中心に製作し、山崎家は香炉などの他尾戸雑器の生産に従事したと考えられているが（註9）、山崎家の製作内容については資料が乏しく不明な点が多い。

窯は現在の高知市小津町に位置しており、寛文9年（1669）の古絵図では高知城の北側に7室程度の規模をもつ登り窯が描かれている。しかしこの後の文政3年、能茶山において磁器藩窯が開かれた

ことから、文政5年（1822）には高知城下の尾戸の窯場は廃止され、工人らは能茶山に移転することとなる。

## （2）森田家陶工の記録と被葬者の位置付け

今回小高坂山森田家墓所で確認した墓標には、初代森田久右衛門から四代目森田弥源次までの藩窯工人と、森田家本家から末家の家人の名が刻まれている。各墓標はA－正徳五年（1715）森田久右衛門、B－延宝八年（1680）被葬者不明、C－寛保四年（1744）森田八丞光政、D－寛保三年（1743）森田八之丞妻、E－被葬者不明、F－被葬者不明（墓石上部損失）、G－被葬者不明（石積み）、H－森田弥源次（没年1803）と同妻（没年1809）、I－正徳元年（1711）森田久右衛門娘龜、J－森田源兵衛光信（没年1725）である。なお「森田本家系図」（註10）によれば、五代久右衛門光為以降は墓所を能茶山に移しており、高坂山には四代目までとその一族の墓が設けられたとされている。しかし、二代三郎兵衛光長と三代三郎兵衛光福については墓標がすでに所在不明となっており、今回の調査でも確認出来ていない。

### （A）森田久右衛門光久（初代。没年1715）

遠祖は近江の佐々木氏とされ、天文年間より長宗我部氏に仕える。天正の『長宗我部地検帳』には久右衛門の祖父にあたる新兵衛光治の給地が現在の高知市万々方面に見えている。父にあたる源兵衛光氏は山内二代藩主忠義に仕え、御用山手代官を務めていた。

久右衛門光久は承応2年（1653）久野正伯の弟子を仰せつけられ、正伯の指導のもとに尾戸焼の技法を確立した。延宝6年（1678）夏には四代藩主豊昌より江戸出府を命じられ、各地の窯業の視察や大名茶人の前での作陶を行った。この年夏から翌7年夏までの各地での見聞を詳細に記録したものが『森田久右衛門日記』である。また、この前年には『幡多中村旅日記』（註11）を記している。久右衛門は正徳5年（1715）75歳で病死するまで63年間を務め、二代忠義から六代豊隆まで仕えた。久右衛門以降は、正徳5年（1715）久右衛門の甥にあたる三郎兵衛光長が後を継いで森田家二代となり、享保12年（1727）その息子にあたる直之丞光福（後号、三郎兵衛光福）が三代を継いでいる。

### （B）被葬者不明（没年1680）

墓標Bは埋葬年代延宝8年（1680）が碑銘から確認できるものの、墓石の摩耗が著しく被葬者名が解読出来ない。しかしこれについて、甲藤勇氏が調査作成された森田家系譜資料を参照すると、初代久右衛門の養子に入った二代三郎兵衛光長が、外姓の中屋左衛門の実子（久右衛門の甥にあたる）であり、この中屋左衛門の妻が墓地所在小高坂山、没年延宝8年と明記されている。こうしたことから、墓碑Aは二代三郎兵衛光長母の墓石であった可能性が高い。

なお、二代三郎兵衛光長については『森田家年譜書』に「一、久右衛門伴三郎兵衛、幼年より父に隨御用手伝相勧、正徳五年、父跡目、同年八月廿三日上下三人扶持相続被仰付勤之。」と記載される。相続時、三郎兵衛はすでに57歳の年齢に達しているが、『森田家年譜書』の記述によれば三郎兵衛は幼年から藩御用の作陶に久右衛門とともに從事しており、窯場の操業は一族の者による協同作業から成り立っていたことが窺われる。二代三郎兵衛は享保12年（1727）に死去するまでの11年間を森田家二代目として務めた。

(C) 森田八之丞光政（末家。没年1744）

墓標Cは「寛保四申子年 森田八丞光政墓 正月□日行年七十一歳」銘をもつ。八丞光政は森田末家にあたり、初代久右衛門の甥にあたる。八之丞光政の作陶に関する記事は『森田家年譜書』には表れていないが、同資料寛延2年（1749）8月12日の天守閣再建に伴う作陶記録に「御本丸成就御移徒御用左之通 一、素焼御瓶子 一対 仕成三郎兵衛一人 一、御雜煮茶碗 三拾 森田□□ 一、御向付小茶碗 三拾 山崎藤七 一、御盃□□ 六つ・・・三郎兵衛一人八月十日、同十一御本丸下へ相詰、御瓶子御天守へ持参上る也。・・・」とあり、これについて、丸山和雄氏は森田本家、末家、山崎家が分担して同一目的の仕事に携わったのではないかとの考察を示されている。そして素焼瓶子が森田家三代三郎兵衛、向付小茶碗が山崎家三代勝利の作とし、雜煮茶碗の製作にあたったのがこの八之丞光政であろうと指摘されている。（註12）

(H) 森田弥源次光次（四代。没年1803）

墓標には「森田弥源次墓 同妻之墓」銘をもつ。弥源次は森田末家の八之丞光政の実子にあたるが、寛延4年（1751）に森田本家の養子となり、宝曆4年（1754）三代三郎兵衛に代わり森田家4代を継いでいる。弥源次光次は『森田家年譜書』には「弥源次（光次）号楽山 一、宝曆四年三月十九日 弥源次儀、父三郎兵衛代勤御聞届仰付られ相動申候。一、同年五月四日 父三郎兵衛病死仕候、早速忌御免仰付られ候。」とある。弥源次の作陶については、宝曆4年（1754）から安永5年（1776）まで儀礼関係での御用や贈答品の製作記事が多く残されている。

その後、四代弥源次は享和3年（1803）8月16日に病死し、弥源次の長男光為（久右衛門）が後を継いで森田家五代となる。

(J) 森田源兵衛光信（没年1725）

源兵衛光信（弥三丞光信）は森田久右衛門の実子、長男にあたるが、陶業は継いでいない。『皆山集』に収められた「前系図」には「弥三丞系別ニ有久右衛門總領貞享四年郷士ニ被召出元禄十六年郷士職甥九十郎へ譲り同年御軍貝役被召出御徒行ニ被仰付申」との記録が残る。

記録から見るように、尾戸窯における森田家の作陶活動は本家・末家による一族の協同操業によつて成り立っていた。また丸山氏が指摘された様に、御用の内容によっては森田・山崎の両家が同じ目的の業務に向かうこともあったのであろう。陶工の身分と待遇については『勤役年譜書』延宝6年の項に「上下三人扶持被成下候。」とあることから、初代久右衛門以降代々、三人扶持の称号を与えられていたことが分かる。また『勤役年譜書』天明2年四代弥源次の代には「天明二年正月十三日 御呼出仰付られ、職業宜仕候と有、帶刀御免仰付らる。」との記事もあり、四代目以前までは工人ながら帶刀を許された身分であったことが窺われる。ただし山崎家は同じく三人扶持であるが、帯刀は無しであった。

その作陶活動の記録をみると、開窯初期から中期にかけては諸公への贈答を目的とした茶陶の作陶記事が多く、他に儀礼用の土器や供食用食器、その他の藩御用品が認められる。一方で、藩用以外にも商品としての売り出しを図ったことが森田家文書の『戸陶値段表』（註13）から知ることができる。ここには「濃茶碗・薄茶碗・茶入・蓋置・香合・風炉」等茶陶の他に、「茶碗・奈良茶碗・ひなの蓋茶碗・

ひなの膳・菊皿・輪皿・菓子鉢・猪口・汁こぼし・汁次・盃台・御上酒入徳利・水吸・水次・香炉・花瓶・手指・花生・大砂物鉢・置物・瓶子・硯水入・ぶんちん・火トボシ・引手・たばこ入・鳥の水あひ・鳥の餌入・ひしゃく立・横渡し・白土器」などの販売品の名称を認めることができる。しかし、江戸後期に至ると贈答品としての作陶に関する記載は急速に減少する。文化6年の『山内家史料豊興公紀』の記述にはすでに土佐藩武士層における茶の湯の衰退が窺われており、藩財政の窮迫と候約策を背景に、尾戸窯も又その作風を転じざるを得なくなつたものと推測される。

この後、文政3年(1820)に能茶山に磁器窯が開かれ、藩窯経営の主体が磁器生産に移ったことから、五代目久右衛門光為の代文政5年(1822)には、尾戸窯場の廃止と尾戸陶工の能茶山移転の命が下される。尾戸窯陶工はこれによって、本俸の三人扶持と補米一石のうち、補米一石を除かれている。仕事は能茶山において従前の如く行われたが、作陶の記録は少くなつておらず、それ以降の近世尾戸窯の作陶状況とその製品については不明な点が多い。

#### 〔謝辞〕

今回の執筆にあたっては、森田家系図について森田芳伯氏より多くの御教示を賜った。また墓標調査においては出原恵三・宮地啓介氏の協力を得、移転先での無縁墓墓標調査に際しては墓地管理元である白馬産業㈱より御配慮を賜った。深く感謝申し上げたい。

#### 〔註〕

- 1)『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年
- 2)山本泰三『土佐の墓』土佐史談会1987年。小高坂山には原鳳山(天明元年)、平尾伴九郎(享和2年)、山川久蔵(嘉永元年)、新国平五郎(明和5年)、小林養仲(宝永6年)、西川春庭(元禄14年)などの武士、土佐藩諸公子の侍臣を務めた田中琢然(文化11年)や医師池川春水(安永2年)、絵師近森山湖(元文2年)等の墓が存在する。
- 3)森田芳行、森田芳伯氏のご教示による。
- 4)今回的小高坂山墓地移転では500基以上の近世墓が移転されており、約500基が無縁墓であった。このうち無縁墓約300基を墓標調査対象とし表4に示した。
- 5)『森田久右衛門江戸日記』は、昭和7年陶器全集刊行会出版の『陶器全集』にて一度刊行されたが、この後、丸山和雄氏の執読による全文刊行が東洋陶磁学会から昭和53年に出された。原本は現在県文化財に指定されている。
- 6)『森田家年譜書』・『森田本家系図』・『皆山集』を参照した。
- 7)『収録方文書』承応2年・・山内家史料『忠義公紀』
- 8)『収録方文書』明暦三年・『官上留書帳』寛文六年・・山内家史料『忠豊公紀』
- 10)森田芳伯「尾戸焼森田家系図について」『土佐史談137号・139号』土佐史談会1974年  
9・11・12・13)丸山和雄『土佐の陶磁』より引用。

#### 〔参考文献〕

- 丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年  
丸山和雄「近世土佐の茶道と焼物」『高知の研究4』清文堂出版  
丸山和雄「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁Vol.5』東洋陶磁学会1978年  
森田芳伯「尾戸焼森田家系図について」『土佐史談137号・139号』土佐史談会1974年  
『山内家史料 第三代忠豊公紀』山内神社宝物資料館1982年  
『七佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年

表4 小高坂山近世墓標一覧(1)

墓標 No	西暦	墓標年代	被葬者名・底名	分類・ 特徴	側面 の形	材質	墓標 No	西暦	墓標年代	被葬者名・底名	分類・ 特徴	側面 の形	材質
1	1675	延宝三〇〇年三月七日	底名	B型・ 楕円	無	砂岩	40	1709	宝永六巳年七月廿六日	底名	不明・ 上部欠損	無	砂岩
2	1675	延宝三乙卯年七月二十九日	底名・□○底尼	A型・ 大型	花崗 岩		41	1730	宝永七年庚寅歲六月十五日	底名	B型	無	砂岩
3	1677	延宝五丁巳七月十七日	底名	椭圓狀	無	砂岩	42	1710	宝永七歲正月九日	今西助右衛門	B型・ 楕円	有	砂岩
4	1677	延宝五丁巳年〇〇	底名	A型	無	砂岩	43	1710	寶永七年庚寅歲七月十日	底名	B型	有	砂岩
5	1678	延宝六年午年〇月三日	底名	A型	無	砂岩	44	1711	宝永六辛卯年四月廿四日	自然縫 の粗削り	無	砂岩	
6	1679	延宝七〇〇口	底名	A型	無・ 表面 に鉢	砂岩	45	1712	正徳庚辰歲冬九月廿八日	□八郎右衛門	D型	無	砂岩
7	1679	延宝七己未年九月二日	金子五郎右衛門	D型	無	砂岩	46	1715	正徳戊辰歲十一月廿日	底名	B型	無	砂岩
8	1688	延宝元丙戌岁七月十七日	新田大輔				47	1716	享保元申歲十一月廿七日	森本丹六妻・森 兵衛右衛門	B型	無	砂岩
9	1688	延宝元丙戌岁九月十四日	二〇忠典南	D型	有	砂岩	48	1716	正徳六年丙申九月五六日	口田左衛門	B型	有	砂岩
10	1682	天和三年庚寅六月二十四日	山間又介直政	B型・ 大型	無	砂岩	49	1720	享保五年庚子十月十五日	斎藤三郎・河内	B型	有	砂岩
11	1683	天和三年癸亥六月十八日	底名	B型	無	砂岩	50	1720	元禄二年辛巳七月十日	長谷川鐵右衛門	B型	一	砂岩
12	1685	又は □口享二年九月二十七日	底名・□口童子	A型・ 小型	無	砂岩	51	1720	享保五庚子十月初	底名	B型	無	砂岩
13	1745	享貞三年丙寅十月十日	底名	B型	無	砂岩	52	1720	享保六庚子正月六日	河田平兵衛	B型	無	砂岩
14	1689	元禄二年巳巳月二十五日	底名・喜多院照	上部破 缺	無	砂岩	53	1720	享保六庚子正月二十一日	底名	B型	無	砂岩
15	1690	元禄江年度年六月十八日	底名	B型・ 大型	無	砂岩	54	1720	享保六年辛丑一月七日	井井茂七郎	B型	無	砂岩
16	1690	元禄三年庚午年正月廿九日	底名・□○信女	A型	無	砂岩	55	1722	享保二年壬寅歲二月十九日	尾澤・口丁姫女	B型	有	砂岩
17	1694	元禄七年戊午年六月	底名・□口惟士	B型	無	砂岩	56	1722	享保二年壬寅歲正月七日	櫻田六郎右衛門	B型	無	砂岩
18	1695	元禄八年乙亥年六月廿七日	源部勘助	B型	無	砂岩	57	1722	享保七壬寅歲九月二十六日	底名	B型	有	砂岩
19	1695	元禄八年庚午年六月廿七日	底名	自然縫	無	砂岩	58	1723	享保八癸卯年六月十二日	底名	D型	有	砂岩
20	1696	元禄八乙亥年九月九日	底名・莊前吉 信女	B型	無	砂岩	59	1724	享保九年庚辰歲正月十八日	底名・泰山口赤 信女	口白樺	無	砂岩
21	1696	元禄十一年庚午年八月五日	千重庵右衛門	B型	有	砂岩	60	1725	享保十乙巳年四月十一日	底名	D型	有	砂岩
22	1701	元禄十四年巳七月	長谷川鐵右衛門	D型	有	砂岩	61	1727	享保十二丁未年四月十三日	底名	D型	無	砂岩
23	1701	元禄十四年五月十六日	底名・母口口	A型	無	砂岩	62	1727	享保十二丁未年	南木林康	A型	有	砂岩
24	1702	元禄十五年壬午十一月二 日	喜多源兵衛	B型	無	砂岩	63	1727	享保十二丁未六月十八日	口口口南庭久	不明・ 上部欠損	有	砂岩
25	1702	元禄十五年壬午十一月廿二 日	名名屋口・左衛門	B型	無	砂岩	64	1727	享保十二丁未年十月廿七日	底名・□○信女	B型	無	砂岩
26	1703	元禄十六〇〇〇三月〇日	底名	A型	無・ 表面 に鉢	砂岩	65	1729	享保十四己酉四月二十八日	新利左衛門	B型	有	砂岩
27	1703	元禄十六癸未	口口口	不明・ 上部缺 損・大 型	無	砂岩	66	1730	享保十五庚成年九月十六日	底名	B型	有	砂岩
28	1703	元禄十六癸未年〇月	□○□底米	不明・ 上部欠 損	無	砂岩	67	1730	享保十五庚成年九月二十七日	村越九郎衛門	B型	無	砂岩
29	1704	元永元甲申年四月二十七 日	改尊松次右衛門	有	無	砂岩	68	1730	享保十五庚成年九月廿四日	出合氏	B型	無	砂岩
30	1705	宝永二乙酉四月五日	底名	B型	無	砂岩	69	1731	享保十六癸卯十一月廿日	底名・□○信女	B型	無	砂岩
31	1705	宝永二酉年十一月廿八日	新田義行	B型	有	砂岩	70	1732	享保十七年壬午九月二十九日	本多勘五郎	B型	無	砂岩
32	1705	宝永二酉年正月廿九日	底名	D型	無	砂岩	71	1732	享保十七壬午年七月月初二日	底名	B型	無	砂岩
33	1705	宝永二酉年十二月四日	中野才右衛門	B型	無	砂岩	72	1732	享保十七年九月廿九日	本多勘五郎	B型	無	砂岩
34	1705	宝永二年乙酉七月八日	植村助助	B型	無	砂岩	73	1733	享保十八年〇月〇日	山水氏	B型	無	砂岩
35	1706	宝永三年四月〇日	小明	不明・ 上部缺 損	-	砂岩	74	1733	享保十八庚午年七月二十七 日	村越九郎衛門	B型	無	砂岩
36	1706	宝永三年四月〇日	不明	口部缺 損	-	砂岩	75	1735	享保二十乙卯年〇〇	底名	不明・ 上部缺 損	無	砂岩
37	1707	宝永丁酉	底名	B型	無	砂岩	76	1735	享保二十乙卯年	岡曾作太夫正定	D型	無	砂岩
38	1708	宝永乙酉	底名	A型	有	砂岩	77	1736	享保二乙・内張〇月廿八日	櫻田右三右衛門	B型	無	砂岩
39	1709	宝永乙酉年十月五日	植村氏女	A型	無	砂岩	78	1736	享保廿一丙辰五月廿二日	釋一向西園口	B型	有	砂岩
							79	1737	元文二丁巳月二日	牛丸郎妻	B型	有	砂岩
							80	1737	元文二丁巳年	底名	B型	無	砂岩
							81	1737	元文二丁巳年八月廿四日	松島茂助正栄	B型・ 楕円	無	砂岩
							82	1738	元文三庚午年八月八日	鶴打梅六	D型	有	砂岩
							83	1738	元文三庚午年七月廿二日	秋葉妙仙女	B型	無	砂岩

表4 小高坂山近世墓標一覧（2）

墓標 No.	西番	権現年代	被葬者名・成名	分類・特徴	御園の狀	材質	器番 No.	西番	権現年代	被葬者名・成名	分類・特徴	御園の狀	材質	
84	1738	元文三庚午年八月二十一日	或名	不明・上部少 鋸	無	砂岩	129	1763	宝曆十三未	村越貞元方成	成名・□口磨上 彫	D型	有	砂岩
85	1739	元文四己未年四月十九日	村越右郎右衛門	D型	有	花崗 岩	130	1763	宝曆十四庚未年二月廿一日	成名・□口磨上 彫	D型	有	砂岩	
86	1739	元文四己未年九月初七日	秋山良義	B型	無	砂岩	131	1763	宝曆十三庚未十二月六日	成名	B型	有	砂岩	
87	1740	元文五庚申年四月二十九日	田畠政太郎	B型	無	砂岩	132	1763	宝曆十四庚未四月二十二日	村越氏女	D型	有	砂岩	
88	1741	寛永元辛酉年九月二日	上級俸八重知姫	B型・幅広	無	砂岩	133	1764	宝曆十四庚未三月五日	池川二兵衛	D型	有	砂岩	
		寛永元辛酉年九月二日	上級俸八重知姫	B型・幅広	無	砂岩	134	1764	宝曆十四庚未三月五日	成名	D型	無	砂岩	
89	1741	寛永九辛酉年九月十九日	川田加口七郎左衛門	A型	有	砂岩	135	1767	明和丁未年	春原二郎	D型	無	砂岩	
		森田兵衛光久								成名・法蓮妙輪	B型	有	砂岩	
90	1742	寛保二壬戌年七月十七日	中田口助助	B型	有	砂岩	136	1767	明和丁未年	喜多喜	B型	有	砂岩	
91	1742	寛保二年生戌	成名	D型	有	砂岩	137	1769	嘉永己丑正年	森友喜三右衛門	D型	有	砂岩	
92	1742	寛保二壬戌年正月十八日	成名	B型	無	砂岩	138	1769	嘉永己丑正月廿日	成名・倩口磨上 彫	D型	有	砂岩	
93	1743	寛永三庚寅年七月二日	井 廉 六	B型	有	砂岩	139	1769	明和己巳六月廿六日	小鳥鶴右衛門	B型	有	砂岩	
		延享元平年四月廿一日	林氏女				140	1771	明和乙卯年二月二十一日	山下要助彌女	B型	無	砂岩	
94	1744	延享元年半了十二月十五日	南野利平義典	D型	有	砂岩	141	1771	明和乙卯年七月六日	成名・真珠萬福	D型	有	砂岩	
95	1744	延享元平年九月二十四日	成名	B型	無	砂岩	142	1772	明和壬辰年七月十一日	成名	D型	有	砂岩	
96	1744	延享元平年九月二十四日	船部久八郎	D型	無	砂岩	143	1772	安永壬辰年十二月十五日	松小鶴丸彌女	D型	有	砂岩	
97	1744	延享元平年十月十四日	武市口二郎	B型	無	砂岩	144	1773	安永二癸巳年二月	成名	D型	有	砂岩	
98	1745	延享二乙卯年五月廿一日	山崎春右衛門	B型・幅 広	無	砂岩	145	1774	安永二平年	難波妙輪	B型	有	砂岩	
99	1745	延享二乙卯年六月廿三日	松岡二郎	D型	有	砂岩	146	1774	安永二甲午年十月廿一日	淡井忠兵彌勝口	B型	有	砂岩	
100	1745	延享二乙卯年三月廿日	大谷久之成美	B型	無	砂岩	147	1775	安永乙未年一月廿六日	本澤久之志	B型	有	砂岩	
101	1746	延享二寅年正月廿二日	成名	B型	無	砂岩	148	1775	安永丙未年二月廿一日	森木井六妻	B型	有	砂岩	
102	1746	延享三年丙寅年二月廿八日	新野平之重	B型	有	砂岩	149	1776	安永丙未年六月五日	成名	D型	有	砂岩	
103	1747	延享四年丁卯年七月十日	成名・□彌七	D型	有	砂岩	150	1776	安永丙未年二月二十七日	村越源助貞則	B型	有	砂岩	
104	1748	寛延元庚辰年	成名	D型	有	花崗 岩	151	1776	安永丙未年五月廿二日	成名	A型	有	砂岩	
105	1748	寔延元庚辰年十月一日	青川茂右衛門虎	B型	無	砂岩	152	1777	安永丁未年十月十一日	村越武左衛門	D型	有	砂岩	
106	1748	寔延元庚辰年八月十五日	成名	上部少 鋸	有	砂岩	153	1777	安水六夏年正月二日	村越口助彌妻	D型	有	砂岩	
107	1748	延享五年庚辰六月十六日	宮地豊元	B型	無	砂岩	154	1777	安水六夏年十月廿六日	北川貞泰妻	D型	有	砂岩	
108	1748	延享五年庚辰八月六日	成名・口磨上 彫各子西郎	B型	有	砂岩	155	1778	延享庚辰二月四日	成名	D型	有	砂岩	
109	1749	寔延二己未年十二月廿一日	吉本忠夫大業	B型	無	砂岩	156	1778	安永庚辰四月二十一日	南院翁航音威	D型	有	砂岩	
110	1750	寔延二庚午年	五藤武八郎体訓	D型	有	砂岩	157	1779	安永八己亥年八月廿三日	瓦塵口馬	B型	有	砂岩	
111	1750	寔延三年十月十八日	石山口一	B型	有	砂岩	158	1779	安永八己亥年	成名	D型	無	砂岩	
112	1751	寔延元平年六月八日	森田長右衛門	D型	有	砂岩	159	1779	安永八己亥年八月廿三日	井澤久助	B型	無	砂岩	
113	1752	寔延二壬申年七月二十九日	成名	B型	無	砂岩	160	1781	安永一辛丑年	村越八郎右衛門	B型	有	砂岩	
114	1753	寔延三年癸酉	村越文左衛門	D型	有	花崗 岩	161	1781	天明元癸丑年三月三日	椎庭真右衛門	B型	有	砂岩	
115	1753	寔延三年癸酉	木澤左右衛門	B型	無	砂岩	162	1781	天明元年十月二日	成名・佐賀貞花	B型	有	砂岩	
116	1753	寔延三年癸酉	成名・児幼童子	D型	有	砂岩	163	1786	天明六年丙午正月二日	梅嶋妙花	B型	有	砂岩	
117	1753	寔延三年癸酉	山下井九郎助	B型	無	砂岩	164	1787	天明七年乙未正月二四日	本山多久彌廣	B型	有	砂岩	
118	1753	寔延三年癸酉年正月三日	服部左衛門	D型	有	砂岩	165	1787	天明七年本年六月十一日	中村吉良菊	B型	無	砂岩	
119	1755	寔延五乙亥歲	北川之系	D型	有	砂岩	166	1790	寔延二庚辰二月廿八日	甲垂曾七太郎	B型	有	砂岩	
120	1756	寔延四年丙午年四月三十日	成名・唐珠彌口	D型	有	砂岩	167	1791	寔延二辛未年七月廿四日	成名・秋砂鉢口	E型	有	砂岩	
121	1756	寔延丙午年九月廿八日	橋毛右衛門	B型	有	砂岩	168	1791	寔延二辛未年七月廿四日	山田貞助止彌	E型	有	砂岩	
122	1756	寔延六年十一月五日	官地貞元	A型	無	砂岩	169	1792	寔延四年辛未八月廿二日	大腹彌助徳之	D型	有	砂岩	
123	1756	寔延六年十一月五日	森奉六	D型	無	砂岩	170	1792	寔延四年丙午九月二十日	奥村角八口	D型	有	砂岩	
124	1758	寔延八年六月十八日	成名	D型	有	砂岩	171	1793	寔延五年正月十一日	渡邊久右衛門	B型・大割	有	砂岩	
125	1759	寔延九年乙卯八月二十三日	森村越八郎右衛門	不明	-	砂岩	172	1794	寔延六年庚十二月廿九日	村越久次衛	B型	有	砂岩	
126	1760	寔延十辰年正月十九日	下元口助	B型	有	砂岩	173	1795	寔延七年乙卯二月二日	俗名・參七	B型	有	砂岩	
127	1761	寔延十年正月二十日	高橋龍太郎	B型	有	砂岩	174	1795	寔延七年正月二日	弘田大藏溝治美	D型	無	砂岩	
128	1762	寔延十辰年正月十一日	出間口兵衛	B型	無	砂岩	175	1795	寔延七年乙卯七月十日	全子善右衛門	B型	有	砂岩	

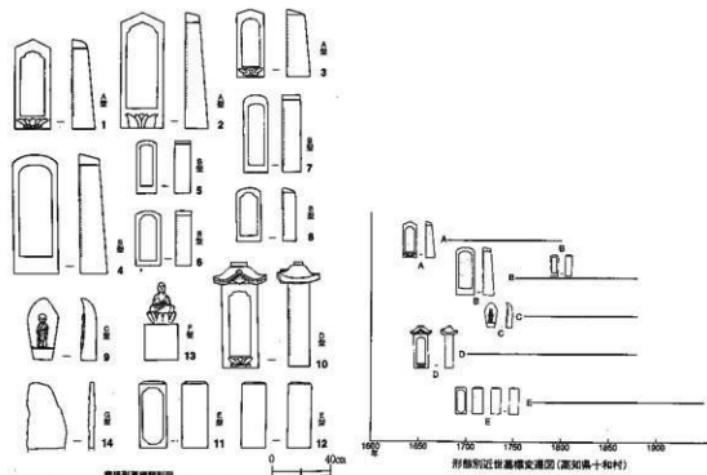
表4 小坂山近世墓標一覧（3）

墓標 No	西面	埋葬年代	被葬者名・或名	分類・ 特徴	側面 の跡	材質	墓標 No	西面	埋葬年代	被葬者名・或名	分類・ 特徴	側面 の跡	材質
126	1796	寛政八年丙辰十月八日	高橋盛次郎	B型	有	砂岩	225	1825	文政八酉七月廿四日	内藤口右衛門	B型	有	砂岩
177	1796	寛政八年丙辰十一月四日	静車馬止之	B型	有	砂岩	226	1825	文政八酉七月廿六日	喜久梅茶黄二	B型	有	砂岩
178	1796	寛政八年丙辰九月十二日	安藤吉右衛門壽一	D型	有	砂岩	227	1826	文政九年丙辰八月廿日	喜留大門	E型	有	砂岩
179	1797	寛政九年丁巳五月六日	横田重七左衛門	B型	有	砂岩	228	1820	天保元年庚寅十一月二十七日	成名口二郎兵衛	D型	有	砂岩
180	1798	寛政十年戊午正月八日	前田文次郎本澤久之助	B型	有	砂岩	229	1832	天保二年壬辰三月六日	村越左右衛門	B型	有	砂岩
181	1798	寛政十戊午二月十九日	横田久七	D型	有	砂岩	230	1832	天保三年壬辰八月二十四日	出羽今介重政	B型・ 大型	有	砂岩
182	1798	寛政十戊午六月七日	横田重五郎	B型	有	砂岩	231	1833	天保四年癸巳十月廿七日	五瀬口八郎左衛門	D型	有	砂岩
183	1798	寛政十丙午正月十二日	五瀬武八郎正則	B型	有	砂岩	232	1833	天保四年癸巳十一月廿日	南木松作後妻	E型	有	砂岩
184	1798	寛政十丙午四月十四日	井上重助女	B型	有	砂岩	233	1833	天保四年癸巳十二月廿日	中島左近衛門茂助	B型	有	砂岩
185	1799	寛政十一年未月十一月十四日	村越八郎右衛門	D型	有	砂岩	234	1835	天保丙午未七月十八日	弘出忠五郎	B型	有	砂岩
186	1800	寛政十乙未年正月廿日	西田平作	B型	有	砂岩	235	1835	天保六年乙未九月廿七日	井澤足作	B型	有	砂岩
187	1800	寛政十丁未年九月廿日	成名	B型	有	砂岩	236	1836	天保七年丙午三月十日	德永左近助太輔	B型	無	砂岩
188	1800	寛政十二庚申年九月廿六日	成名	D型	有	砂岩	237	1837	天保八年丙午六月十日	渡辺柳香	B型・ 角丸	有	砂岩
189	1801	享和元年辛酉十一月十四日	横川文九郎	B型	有	砂岩	238	1837	天保八年丙午六月三十日	德永慶仁平	B型	無	砂岩
190	1802	享和二年壬午十月九日	北代藏	B型	有	砂岩	239	1838	天保九年庚午三月十日	德永貞朝助	B型	無	砂岩
191	1804	文化元年申子三月	□口右衛門兼行	B型	有	砂岩	240	1839	天保十年庚午八月廿日	村越左近衛門美	B型	有	砂岩
192	1804	文化元年甲子年十二月十四日	西田兵衛助	B型	有	砂岩	241	1840	天保十美月廿六日	今村次良兵衛	B型	有	砂岩
193	1807	文化丁卯年二月八日	横田重五郎・其知娘	B型	有	砂岩	242	1840	天保十一年子二月廿七日	城石	D型	有	砂岩
194	1808	文化五丁卯年六月廿七日	熊・其知娘	B型	無	砂岩	243	1840	天保十一年子八月卅日	今村三郎兵衛	B型	有	砂岩
195	1809	文化六己卯年十一月一日	久万屋平六	B型	有	砂岩	244	1840	天保十一年庚子八月廿九日	山田甚長兵衛	B型	有	砂岩
196	1817	文化十七丙午	同上	B型	有	砂岩	245	1840	天保十一年子十月二日	黒田出之七郎	B型	有	砂岩
197	1811	文化八庚未年正月廿日	成名	B型	有	砂岩	246	1841	天保十二年辛丑八月四日	刈谷番七	B型	有	砂岩
198	1812	文化九辛未年四月廿五日	平作	B型	無	砂岩	247	1841	天保十二年庚午四月廿日	久保田宇平	B型	有	砂岩
199	1813	文化十癸酉九月十日	成名・重慶院院 豊秀院女	D型	有	砂岩	248	1841	天保十二年壬午十月九日	津井伊女	E型	有	砂岩
200	1813	文化十年癸酉十一月廿日	大津柳十郎作	B型	有	砂岩	249	1843	天保十四年四月廿七日	河谷番七	B型	有	砂岩
201	1814	文化十一甲戌年五月廿九日	上郡欠	B型	有	砂岩	250	1844	天保十五年十月十九日	西東市正綱	B型	有	砂岩
202	1814	文化十一甲戌年	横田久七	割鉢角 鑿状	有	砂岩	251	1845	弘化二年乙巳四月廿一日	印中田秋生	B型	無	砂岩
203	1814	文化十一甲戌年十一月廿一日	移村富五郎	B型	無	砂岩	252	1845	弘化二年乙巳七月廿日	中島七左衛門正	B型	有	砂岩
204	1814	文化十一年甲戌六月廿一日	井井志在衛門禪全	B型	有	砂岩	253	1846	弘化三丙午年五月二十日	亀川平次斎新書	B型	有	砂岩
205	1815	文化十二号口	昌雄・八島右衛門	D型	有	砂岩	254	1846	弘化三丙午正月二日	玉川や助助	B型	無	砂岩
206	1815	文化十二乙亥九月十九日	成名・齊昌院祐 妙抄・月燈女	D型	有	砂岩	255	1847	弘化四丙午	源谷柳家・同人 妻	B型	有	砂岩
207	1815	文化十二丙午二月三日	大津柳十郎作	B型	有	砂岩	257	1848	弘化五年丙申正月廿二日	津野八之丞	B型	有	砂岩
208	1815	文化十二丙午十二月廿口	川原某十次	D型	有	砂岩	256	1848	嘉永元年九月十九日	北代藏藏	B型	有	砂岩
209	1816	文化十三子七月廿五日	成名・齊昌院祐 士信	B型	有	砂岩	258	1849	嘉永二年丙午十一月廿一日	村越左近衛門	E型	有	砂岩
210	1816	文化十三子七月廿五日	今西口作	B型	有	砂岩	259	1849	嘉永二年己巳	成名・妙子	小明	無	砂岩
211	1819	文政二己卯年四月二十七日	大津柳十郎作	D型	有	砂岩	260	1849	嘉永二年丙午五月十八日	井上利作	B型	有	砂岩
212	1820	文政三庚辰一月六日	前野利平作	D型	有	砂岩	261	1850	嘉永三年庚午四月二日	音浦・右衛門	B型	有	砂岩
213	1821	文政四年丙午十月八日	大津柳十郎作	B型	有	砂岩	262	1851	嘉永四年丙午四月	田中鹿之助	B型	無	砂岩
214	1822	文政五年丙午九月廿七日	竹村直次	B型	有	砂岩	263	1852	嘉永五年壬子年十二月七日	鶴賀昭妙	D型	有	砂岩
215	1823	文政六年癸未年十一月廿七日	北代才左衛門	D型	有	砂岩	264	1853	嘉永六年正月廿六日	時久勤七	B型	有	砂岩
216	1823	文政六年癸未年九月廿二日	西園作平夫	B型	有	砂岩	265	1853	嘉永六年正月廿二日	久市起平子	E型	有	砂岩
217	1824	文政七年甲申年七月	成名	D型	有	砂岩	266	1854	嘉永七年甲申八月三日	村越左近衛門	E型	有	砂岩
218	1824	文政七年甲申年九月二十日	村越彌助	E型	有	砂岩	267	1854	嘉永七年三月廿一日	横瀬只吉郎妻	B型	有	砂岩
219	1824	文政七年甲申年二月廿一日	徳麻屋吉左衛門	B型	有	砂岩	268	1854	安政元甲寅年十二月四日	渡邊五郎利真	A型	有	砂岩
220	1824	文政七年甲申八月	津野好八之	B型	有	砂岩	269	1854	安政元甲寅年十二月四日	時久勤七	B型	有	砂岩
221	1824	文政八年癸未年十月十三日	大津柳十郎作	B型	有	砂岩	270	1856	安政元丙午七月廿二日	久市起平子	B型	有	砂岩
222	1824	文政七年甲申年八月八日	池田俊義	B型	有	砂岩	271	1857	安政四年八月廿日	村越左近衛門	E型	有	砂岩
223	1825	文政八年七月廿日	内木山内	B型	有	砂岩	272	1857	安政四年六月廿五日	町田助之助	B型	有	砂岩
224	1825	文政八年乙酉八月廿七日	内木山内	B型	有	砂岩	273	1857	安政四年丁巳二月三十日	備山莊	B型	有	砂岩
							274	1858	安政五年八月四日	出中勤七	自然磨 に削	砂岩	
							275	1859	安政六年正月廿一日	喜源右近衛門	B型	有	砂岩
							276	1859	安政六年乙亥八月八日	桃嶋只助郎	B型	有	砂岩
							277	1860	萬延元年八月八日	村越只貞娘	R型	有	砂岩
							278	1860	萬延元年庚申七月廿一日	村越龍吉玄美	B型	有	砂岩

表4 小高坂山近世墓標一覧(4)

墓標 No.	西暦	埋葬年代	被葬者名・氏名	分類 種類	側面 の路	材質
279	1862	文久二年十二月十七日	津野市造 同人 妻	B型	有	砂岩
280	1863	文久三年正月二十日	大内忍之助	B型	有	砂岩
281	1863	文久三年五月二十六日	寺田寅八 同人 妻	B型	有	砂岩
282	1864	元治元年子十月廿四日	喜下元益	B型	有	砂岩
283	1866	慶応二年正月二日	井上彦平美	B型	有	砂岩
284	-	不明	氏名	A型 大型	無	花崗岩
285	-	□□□□	氏名	B型	無	砂岩
286	-	□□□	氏名	不明上 部大 幅 大 型	無	花崗岩
287	-	不明	氏名	A型 大型	無	砂岩
288	-	不明	中山休夢	B型	無	砂岩
289	-	□□□三月廿九日	氏名	A型	無	砂岩
290	-	□□□庚午五月六日	不明	B型	無	砂岩
291	-	不明	氏名	A型 大型	無	花崗岩

\*墓標の分類は岡本桂典「非塔形墓標類型図」による。



非塔形墓標類型図  
1-2(34号)、4-5(6-7)(36号)、8(37号)、9(38号)、10(39号)、11(40号)、12(41号)、13(42号)、14(43号)  
1(文政四年)、2(文政四年)、3(文政四年)、4(文政四年)、5(文政四年)、6(文政六年)、7(文政十一年)、  
8(文政二年)、9(文政十二年)、10(文政四年)、11(文政四年)、12(文政四年)、13(文政四年)、14(文政四年)  
(A型: 石碑型墓石である)

Fig.12 非塔形墓標類型図

岡本桂典「土佐十和村の墓標について」『立正史学』1986,

『土佐加石塔・石仏墓礼1』高知県立歴史民俗資料館2004. より引用)

## 第2節 土佐近世墓の諸様相

### はじめに

土佐における近世墓の研究は、今まで岡本桂典氏によって墓標など上部施設の在り方を中心に精力的に進められてきた。しかしながら、その一方で、地下の埋葬施設については、特に近世墓において、資料数の不足から研究が非常に立ち遅れていると言わざるを得ない。これは近世墓の多くが現存する個人の墓地に属するものであったり、墓地移転に伴う改葬の場合でも宗教的儀礼を執り行うのみで移転を完了されてしまい記録保存に至らないなどという、法制的・習俗的な側面での制約に原因するところが多い。

こうした現状の中でも、近年では県中央部の小籠遺跡、田村遺跡、奥谷南遺跡などで近世農村墓地の考古学的な発掘調査がなされ、地下の埋葬施設や副葬品の在り方まで及んだ報告事例が序々に蓄積されつつある。しかし、これらの報告例についても、調査の段階にはその殆どが墓標などの上部施設を失っており、地下の埋葬施設のみに限定されたもののが多かった。碑銘を伴う墓坑の報告事例は没年代17世紀後半の墓誌銘が残る奥谷南遺跡の土葬墓の事例が挙げられるが、こういった例は県下では希であり、埋葬年代が明らかな墓坑数基を確認できた今回の小高坂山森田家墓所の事例は、県下の近世墓研究にさらに貴重な実例を加えたものといえるだろう。また本遺跡は初めて城下町周辺での近世墓制の実態を明らかに出来たという点でも重要な情報を提供している。

そこで今回は、森田家墓所の調査成果にこれまでの県下の発掘調査報告事例を加えて集約し、特に墓坑形態や副葬品など地下の埋葬形態について、県下の近世墓の様相を検討することとした。

### 1. 県下の近世墓報告遺跡

まず、県中央部での近世墓報告遺跡の概要を述べることとする。各検出墓坑の形態・規模・推定埋葬年代等は表5に示している。

#### ①小高坂山墓地（高知市三ノ丸）

小高坂山墓地は、高知城下町の西方に面する丘陵上にあたり、近世には城下とその周辺に居住する武家を中心として近世墓地が形成された。墓域は丘陵の裾から上部にかけて広がり、近世から現代まで墓地が営まれている。

ここに所在する森田家墓所は、土佐藩窓戸戸窓の初代陶工森田久右衛門と代々藩窓の陶工を勤めた森田家一族の墓所で、墓碑銘からみて17世紀後葉から19世紀前葉頃までここに一族の墓が営まれたものとみられる。検出墓坑は10基で、墓坑形態は円形が2基、長方形が7基、菱形を伴う小型円形が1基であった。

この他、当墓地では、山内忠義の側室にあたる三ノ丸壽性院と、坂本家墓所の立会調査が行われている。坂本家墓所では、2基が長方形1基が楕円形で、いずれも埋土下層には木炭が厚く埋められている。墓碑銘からみた埋葬年代は18世紀前半から中葉にあたる。一方、「寛文元年□卯年」（1661年）墓碑銘を伴う壽性院墓は、墓坑下層に木炭が多量に埋められ、さらに箱形木棺の外側全体を覆う様に漆喰等を埋め重ねている。棺内部は人骨の残存状態も良好である。副葬品としては色絵磁器碗1点を

確認しているが、六道銭の有無等については不明である。

②奥谷南遺跡（南国市岡豊町）

高知平野北側の山裾から尾根上にかけて展開する墓地で、近世から現代までの墓が営まれる。調査ではこの尾根頂部から3基の近世墓を検出している。墓坑形態はSK1・SK2が底部2段堀りで、最下段の平面形態はSK1が方形、SK2が長方形を呈する。又、SK3は平面形態長方形を呈する。埋葬主体はSK1が肥前産陶器甕を使用した甕棺であり、これに肥前産の陶器鉢を蓋として転用している。甕棺内からは乳児人骨が検出されており、備葬を窓わせる墓坑形態と周辺に残された石盤の墓誌からみて、SK1は乳児を埋葬した儒墓（土葬墓）であろうと報告されている。SK2は埋葬形態不明。SK3は木棺墓とみられる。埋葬時期はSK1が近辺に残された墓誌銘と甕棺の生産年代から17世紀中葉、SK2もSK1との位置関係と墓坑形態の共通性からみて近い年代であろうと報告されている。又、SK3は18世紀後半から19世紀前半に比定されている。なお、SK1被葬者の階層性については墓誌から掛川町の鍛冶頭木原作左衛門の一族のものと推定され、SK1・2とSK3との墓坑形態の差は、階層差を反映したものであろうとの考察がなされている。

③姫野々土居跡（高岡郡葉山村）

山間部に位置する姫野々土居跡は中世の有力国人である津野氏の居館跡であるが、ここでは3基の近世墓も検出されている。墓群は並列するSK10・SK11とそれに近接するSK9からなっており、いずれも円形である。これらは副葬品として肥前内野山窯の鋼線縄小皿や灰釉小杯、土師器杯等を出土しており、いずれも17世紀後半に比定される。

④小籠遺跡（南国市小籠）

県中央部の農村に立地する墓地である。近世小籠村では、17世紀中葉以降水路と溝によって区画された耕作地間に居住域が点在する農村景観が展開しているが、調査Ⅲ区ではその一角にて墓地が確認された。ここでは22基の近世墓が検出され、これらが耕作地地割りに沿った軸方向をもって東西方向に配列されている。墓碑は残存しないが、副葬遺物の年代観からみて17世紀末から18世紀代にかけて造営された一族の墓地であろうと報告されている。墓坑の平面形態は、円形が3基、長方形が10基、隅丸方形又は隅丸長方形が7基である。

⑤田村遺跡（南国市田村）

同じく農村に展開する墓地で、古代以来の条里によって区画された耕作地と居住地の間に、2~20基程度の小規模な墓群が点在する。B4区では、17C後半と18世紀前半の2基の墓からなる墓群、17C後半から18世紀前半にかけての4基の墓からなる墓群、18世紀から19世紀にかけての14基の墓によって構成される墓群を検出している。この他にB1区では19世紀中葉から近代までの7基の墓からなる墓群、F5区では18世紀から近代までの28基の墓で構成される墓群を検出している。いずれも墓坑の平面形態は方形あるいは長方形である。

⑥林田遺跡（香美郡土佐山田町）

物部川中流左岸に位置する遺跡で、近世の円形墓SK10が検出されている。墓坑埋土中には炭化物と焼土が多量に含まれ、上層からは炭化した藁が塊状に出土している。床面には径50~30cm大の大型碟が数個敷き詰められており、その上面から炭化した棺材と寛永通寶5枚が出土している。検出状況

からみて、棺を礫床の上にて焼いた火葬墓であろうと報告されている。

以上の様に、県下での近世墓報告事例は決して多いとは言えない。小籠遺跡・田村遺跡の事例は、集落内に一族を単位とする小規模な墓域が点在するもので、その景観は現代まで引き継がれている。また林田遺跡は集落周辺の河川岸段丘上に、奥谷南遺跡は集落に面する山裾に墓地が設けられるものである。これらのうち小籠遺跡・田村遺跡・林田遺跡はおそらく農民層の墓地であったと思われる。一方、小高坂山墓地の事例は城下町に面する丘陵上に墓域が設けられるものであり、残存する墓標群とその立地条件からみて城下とその周辺に居住する武家層を主体に構成された墓域と推察される。今回の検出事例についても大名家親族や武士、藩関連の工人といった階層差が認められている。

では、こういった墓地の地域性、被葬者の階層性の違いは、墓坑形態や埋葬形態などどのように反映するのだろうか。又、そこには地域差や階層差を越えて普遍的に認め得る年代の変化はあるのだろうか。こうした観点も踏まながら、以下表5のデータをもとに検証を進めることとしたい。

## 2. 墓坑形態について

土葬・火葬墓を含め、検出墓坑の形態の違いによって以下、分類を行った。

### (1) 分類

A類：平面形が円形を呈するものである。底部は平坦なものと底部周縁に浅いリング状の凹みを残すものがある。

A'類：上記の形態で小型のもの。

B類：平面形が方形、あるいは短軸：長軸比が1対2以内の短い長方形・隅丸方形・略方形に近い不整形などで、底部が平坦なもの。

B'類：上記の形態で小型のもの。

C類：平面形が長方形を呈し、底部が平坦なもの。

D類：底部が二段掘りとなるもの。

このうちA類・B類・C類・D類が土葬墓である。A類は底部周縁に桶痕とみられる浅いリング状の凹みを残すもの（小籠SK33）があり、埋葬形態は座葬の早桶とみられる。B類は座葬あるいは屈葬の木棺。又、小型のB'類は幼児を埋葬したものである。C類は寝葬の箱形木棺。D類は儒墓で、乳児骨を納めた壺棺の事例（奥谷SK1）が確認されている。このD類については報告事例が少なく、こういった形態が県下にて普遍的に認められるものなのか今後の資料増加を待ちたい。次に、A'類が火葬墓である。埋葬主体は壺棺で幼児骨を納めた事例（森田家SK9）が確認されている。

### (2) 墓坑形態の年代的変遷

まず、上記の中で特に墓標や廻葬遺物の年代観から埋葬年代を特定できた造構を表5より抽出し、時期別に各形態の出現状況をみるとした。それによると、17世紀後半ではA類が3基（姫野々土居SK9・10・11）、B類が1基（田村B4SK430）、C類が3基（田村B4SK530・565・566）、D類が2基（奥谷SK1・2）。17世紀末から18世紀前半ではA類が2基（森田SK10、田村F5SK5002）、B類が2基（田村B4SK554・F5SK5015）、C類が6基（森田SK1～4、奥谷SK3、田村B4SK556）。

18世紀後半から19世紀ではC類が23基（森田SK7・8他）、A'類が1基（森田SK9）が挙げられる。ただ、A類・B類については副葬品を伴わないものが多く、表5ではA類10基、B類15基が年代的位置付けができるず除外されている。又、おそらく両者のこうした性質によって、遺跡内でも墓として特定されず未報告に終わるものも多かったと思われる。したがって、上記のデータ数値は各形態間の出現比率を正確に表し得るものではなく、おそらく17世紀から18世紀のある時期までではA類・B類の実態数はもっと多いものと予想される。

こうした資料上の限界はあるが、(1) 17世紀後半には円形、短い長方形や略方形、長方形、底部二段掘りの墓坑形態が存在する。(2) 17世紀末から18世紀前半には円形、短い長方形、長方形の3者が併存する。(3) 18世紀中葉以降になると殆どが長方形墓坑で占められ、幼・小児の埋葬墓に限り別形態の土葬墓や火葬墓が残る、という形態変遷の傾向はみてとられると思う。さらに、各形態の出現時期に注目すると、A類-円形タイプは肥前内野山銅線釉皿を副葬する姫野々土居跡SK10・11からみて17世紀後半、B類-方形タイプとD類-底部二段掘りタイプも17世紀後半までには出現している。またC類-長方形タイプは田村遺跡SK530-565-566(17世紀後半)や森田SK1の埋葬年代(1715年)からみて、17世紀後半から18世紀前半までには出現しているとみられる。ただC類は17世紀後半のものについては短軸が70-80cm大とやや幅広であり、幅の狭い短冊型の長方形墓坑が明確化するのは森田SK1(1715年)の段階まで待たなければならない。

### (3) 地域特質と階層差

先述の様に、土佐では18世紀前半までは円形、短い長方形や略方形、長方形の各タイプの土葬墓が併存しつつ造営され、18世紀後半以降からは箱形木棺を使用する短冊型の長方形墓坑が土佐中央部の墓坑形態の主流へと転じる。こういった形態変遷の在り方は他県でも一般的に認められる状況であるのか、他県の報告内容とも対照させておきたい。

まず福岡県の席田青木遺跡では17世紀後半から18世紀中葉に早桶を使用した円形墓坑が使用され始め、18世紀前半から19世紀には、円形墓坑に在地窓の壺棺を使用するようになるという。また、寺院境内墓地が調査された大阪中央区法円坂の難波宮跡・大阪城跡調査(NW93-12次調査)では、火葬墓27基と土葬墓23基が検出されているが、そのうち18世紀前半を中心とする土葬墓は殆どが円形で、12基が桶を用い、10基が丹波・信楽・肥前産の壺棺を用いたものであるといふ。

こういった県外での事例と比較してみると、桶を用いた円形墓坑が17世紀後半から18世紀前半には存在する点では共通性がみられる。ただ本県では、九州・大阪でみられるような成人墓への壺棺の使用は認められず、九州の様に19世紀以降も円形墓が造営され続けることはない。桶・箱状木棺・壺棺等の埋葬主体の差には、大型の壺棺を供給できる生産地が周辺に存在するかどうかという地域の立地環境も大きく影響するとみられるが、ここにも土佐の地域特性をみることが出来る。

また墓坑形態の違いには、土葬・火葬という埋葬形態の差も大きく関わってくる。今回県下で確認した成人墓は人骨の残存状態の悪いものが大部分で土葬・火葬の確実な岐別は難しいが、しかし成人墓の殆どは土葬墓とみられるものであった。また火葬墓の事例として、物部川中流域の林田遺跡SK10で木棺を焼いて埋め戻した火葬形態が認められたが、確認事例は1例のみでありこうした埋葬形態が県下の山村から農村部にかけて広くみられるものは今後の検討課題としたい。

これに対して近世大坂においては18世紀以降埋葬者数の増加に伴って火葬墓の割合も増し、藏骨器として土師質の火消し壺や有蓋小型壺が使用されるとの報告がある（註1）。埋葬が火葬・土葬のいずれによるかは、儒教思想の浸透や信仰上の問題の他に、埋葬者数の増加に伴う土地利用上の制約が考えられ、ここには人口の集中する都市遺跡と地方との違いが看取できる。

この他に土葬・火葬墓の出現比率には藩の法制上の問題も関与したと考えられる。特に土佐においては、17世紀以降、藩による儒教思想の奨励が強く進められ、それに伴って土葬墓が奨励された。近世の法令を編纂した『憲章簿』「里正之部」によれば、そこには「火葬御制禁并役方定之事 一、慶安四辛卯年、御國中火葬御制禁被仰出之。一、天和三癸亥年、御國中役方御定目被仰出之。」との記述がみられる。土佐では火葬墓の禁令が慶安4年（1651）に出されたことが分かる。こうした統制も県下の近世墓の形態特質を大きく左右させる要因になったと考えられる。

最後に、県下の土葬墓には特徴的な埋葬形態を示した事例が幾つかみられたためここにつけ加えておく。方形墓坑の小籠SK18・24は底部に礫と粘土を敷き詰めており、厚葬であろうとの報告がなされている。又、小高坂山森田家墓所と三ノ丸壽性院墓所では、墓坑下層埋土中から炭化物が多量に出土しており、埋葬時には木炭が棺内や棺周辺に入れられていたものと予想される。また特殊な例として、三ノ丸壽性院墓所では木棺外周に漆喰等を埋め込む埋葬形態が確認された。このうち壽性院墓所の特殊な形態については、大名家一族という被葬者の階層性が反映されたものとみることができよう。（註2）

### 3. 副葬品について

#### （1）六道銭

土佐において、地下に銭貨を埋納する行為は具同中山遺跡群、姫野々土居跡、岡豊城跡など中世遺跡の地鎮跡からすでにみえているが、墓坑内への銭貨副葬が一般化するのは近世以降である。墓坑内への副葬銭貨、いわゆる「六道銭」は、俗に「三途の川の渡し貢」と言われるもので、死者が六道の辻にある六地蔵に1枚ずつ賽銭を渡すと考えられていることから古銭6枚組のものが最も多いとされる。県下でこれまでに確認された六道銭はその殆どが墓坑床上の中央部から北側にかけて出土したもので、中には布の付着痕跡を留めて検出されたものもあった。こうしたことから、六道銭は一般に被葬者の胸元近くに納められ、その際には布に包んだり布袋に入れて死者の額元に掛けられたとみられる。六道銭の副葬は県外遺跡では浄土宗・浄土真宗・臨済宗など各宗派の墓で確認されているということであり、（註3）土佐の近世墓においてもこうした風習が広く浸透したものと予想される。以下では、小高坂山森田家墓所、奥谷南遺跡、姫野々土居跡、小龍遺跡、田村遺跡の六道銭について、その内容を検討することとする。なお、古銭の年代鑑定は泉幸代氏によるもので、その内容は別章の古銭観察表（表3）と出土銭貨一覧（表6）に示している。

##### ①小高坂山森田家墓所出土の六道銭

今回的小高坂山森田家墓所の調査では、六道銭の出土数自体は多いとは言えないが、墓標銘から埋葬年代が導きだせる資料が含まれているため、その内容を特に明記しておきたい。森田家墓所の調査で六道銭の出土が認められたものはSK1・3・6・8・9の6基である。

まず、正徳5年（1715）の墓標銘をもつSK1からは6枚が出土しており、その内分けは古寛永4枚、新寛永2枚の組み合せとなる。この中には岡山銭（初鋲年代1636年）、四ツ宝銭（初鋲年代1708年）、及び不旧手銭（初鋲年代は1716～1735年の説あり）が含まれている。

次に、寛保4年（1744）墓標銘のSK3からは、古寛永3枚、新寛永3枚の組み合せからなる六道銭が出土する。この中には岡山銭が含まれる。

SK6は確実な墓標銘を伴わないが、ここからも6枚が出土する。内容は6枚とも新寛永であり、中には不旧手銭が含まれている。

墓標銘と被葬者の没年代記録から文化6年（1809）を埋葬年代とするSK8からは、新寛永3枚が出土しており、中には文銭が含まれる。

幼児骨を納めた臺棺墓SK9は墓坑の切り合い関係から1809年以降と推定される。ここからは4枚が出土しており、3枚が新寛永、1枚は観察不能である。

上記遺構については古寛永（初鋲1636年）・文銭（初鋲1668年）・新寛永（初鋲1697年）のいずれについても、各々の貨銭の初鋲年代と墓坑埋葬年代との間で整合性に問題のあるものは特に無かった。

## ②県下の六道銭出土傾向

県下の六道銭出土墓坑を、埋葬年代別に示したものが表6-1～4である。それによれば、近世墓への寛永通宝の副葬が確認され始めるのは17世紀後半の田村B4SK430からであり、近世全体では時期不明の墓も含めて39基に六道銭の副葬が認められている。六道銭の出土の有無によって墓の特定が左右されたり、陶器など年代特定の根拠を得やすい墓では六道銭を共伴する傾向が強いなど資料的限界があるため、出現比率の実態数はもっと低い数値になると考えられるが、まず先の表6-1～3を用いて、年代毎の六道銭出土比率の増減を大まかに捉えておきたい。それによれば、17世紀後半では検出墓9基中3基、18世紀前半では10基中7基、18世紀後半から19世紀中葉では26基中17基となり、18世紀以降六道銭の副葬が一般化し以後増加していく状況がみて取れる。また、時期不明のものも含めて墓坑形態別に出土比率を見ても、A類では15基中3基（20%）、B類では18基中6基（33%）、C類では49基中28基（57%）となり、ここでも18世紀前葉以降一般化する短冊型長方形墓坑C類での出土比率が高まっている。

枚数については、17世紀後半で6枚組が3基。（表6-1）18世紀前半では6枚が3基、2枚・4枚・5枚・7枚が各1基。（表6-2）18世紀後半から19世紀では6枚及び5～6枚が7基、5枚が4基、1枚が2基、2枚・3枚・4枚・14枚が各1基であった。（表6-3）これによれば、全体を通じて6枚セットがやはり最も多い。しかし、17世紀後半は6枚組が100%近いのに対して、18世紀以降では全般に6枚組以外のものの占める比率がかなり増加してくるようである。すなわち表6-2～4全体から見ると、6枚組又は5～6枚が44%、5枚組が15%、4枚組が10%、3枚組が5%、2枚組が8%、1枚が8%、7枚組が8%、14枚組が3%という状況であった。

こういった6枚組以外の埋納や六道銭を伴わない墓には、年代的背景の他にどういった要素が関わっているのだろうか。6枚組以外の副葬は農村部の田村遺跡で18世紀前半から、城下町周辺の小高坂山墓地で19世紀以降から見えており、出現に若干の時期差があるが、十分な資料数を得られていないため、ここからは地域差・階層差のようなものを見出すことができなかつた。

一方、乳幼児墓である森田家墓地SK9（19世紀）、田村遺跡B4SK534（19世紀）、奥谷南遺跡SK1（17世紀後半）の場合は、4枚組や副葬無しであり、成人・乳幼児の違いが六道銭枚数に影響を与えている可能性は高い。

以上の様に、小高坂山墓地、田村遺跡、小籠遺跡とも、18世紀代以降は性差・地域差は認めにくい。又、18世紀以降から遺跡の六道銭出土比率が伸び始めるが、この段階には6枚組という概念がかなり薄れ、特定の枚数に規定されない副葬の在り方が一般的となるようである。ただし、こうした傾向が県下全般に認められるのかどうかについては、資料数が非常に限定されているため現段階では断言し難く、今後の資料増加による再検討を待つこととした。

### ③銭貨別出土傾向

最後に、県下出土の六道銭について、出土銭貨のセット関係を検討しておきたい。今回確認された六道銭には銅銭・鉄銭とも含まれ、副葬に際して特にある種類のものを選んで納めたというような気配はみられない。こうしたことから、副葬された銭貨の組み合せは、当時の貨幣流通の在り方を示す一括資料として活用できるものと考えられる。又、桜木晋一氏は九州地方での六道銭の銭貨組み合せをもとに、銭貨流通の量的変化の在り方をセリエーション分析し、古寛永（初鋳1636年）・文銭（初鋳1668年）・新寛永（初鋳1697年）・寛永鉄銭（初鋳1739年）の流通市場での交替が漸移的に進み、寛永鉄銭が出現する18世紀中期には古寛永と文銭は殆ど姿を消す（桜木1990・1991）ことを指摘している。（註4）又、関東においてもほぼ同様の結果が報告されている。（鈴木1988）（註5）こうした視点に沿って、以下では高知県下出土の六道銭についても銭貨のセット関係を検討し、その年代的変化を追うこととする。

再び表6-1～4に戻り、埋葬年代別に出土銭貨の内容を見てみたい。資料数が限定されるが、ここからは一定の傾向を看取することはできると思われる。まず、17世紀後半の田村遺跡B4SK430・530・565出土資料は全て古寛永で占められる（表6-1）。次に、18世紀前半以降に入ると新寛永が出現し平均してその比率が60%を超すまでになるが、古寛永・文銭は依然残る。ただ、この段階の組成内容には遺構間で差があり、埋葬年代1715年の小高坂山森田家SK1では古寛永の残る比率がより高く、埋葬年代1744年の森田家SK3では古寛永と新寛永とが同比率程度である。一方、田村遺跡B4SK554・556・F5SK5002には古寛永・文銭は残らないなどの結果が出ており、埋葬時期や遺跡によって幾分かの差が出るようである。続く18世紀中葉以降では、新寛永と鉄銭を主体として構成され、一部に古寛永の残る事例を認める以外には、古寛永と文銭は殆ど残らない。

この様に、古寛永が鋳造中止年代以降もしばらく流通し18世紀中葉頃まで新寛永と共に存するというデータ結果は、九州・関東での報告結果とほぼ大差が無く、土佐においても古寛永から新寛永への変化が漸移的なものであったとみることができる。又、城下周辺・農村部の各遺跡ともその変化形態に大きな差異は認められず、階層差や地域差を越えた一般的な貨幣流通の在り方を示しているものと思われる。

### （2）他の副葬遺物

六道銭に次いで、多く認められるのは撫管であり、中には小高坂山森田家墓所SK4・SK6の様に外面に布の付着を認め、布に包んで棺内に納められた様子を示すものがある。城下町周辺・農村と

もに煙管の副葬が見られ始めるのは18世紀以降からで、小高坂山墓地では1715年墓碑銘をもつ小高坂山森田家墓所SK1を初現とする。小籠遺跡、田村遺跡などの農村部ではその副葬が一般化するのは18世紀後半以降からである。

次に多く見られるのは小杯、碗、猪口などの飲食器である。飲食器の副葬は田村遺跡に特に多くみられ、17世紀後半から18世紀前半以降は肥前産磁器や在地産陶磁器による碗・小杯の出土が増える。特に19世紀以降は在地の能茶山産磁器の中碗や小杯、肥前系の笹文小杯など日用雑器ランクの飲食器が高い割合で副葬されている。又、近代以降に古錢の副葬が途絶えた後も、碗・小杯の副葬の習慣は依然残っており、田村遺跡B1SK113・114では、酸化コバルトを用いた肥前系磁器や在地系陶器の碗類が出土している。

一方、城下周辺に立地する三ノ丸墓地の森田家墓地では、同時代の墓坑においても先の田村遺跡に比較して碗・小杯の出土は認めにくく、六道銭と煙管のみの組み合せが多かった。城下側の事例が僅少なため、こういった違いが、地域間の風習や宗派上の違いによるものなのか、階層差が反映したものは特定し難い。今後、城下側の資料の増加を待って再検討したい。

この他に例外的なものとして、小児墓とみられる田村遺跡B4区のB4SK534で玩具と思われるミニチュアの白磁碗、森田家墓地SK8から玉と櫛が出土している。このうち櫛については、被葬者の装身具であった可能性もある。

この様に、土佐では六道銭の他、喫煙具と飲食器を副葬する事例が目立った。県外の報告をみると、関西では土師器皿・磁器碗・漆器椀・磁器小杯など食器類の他、数珠玉・剃刀・鉢・紅皿・合子・簪、他に階層性を示すとみられる刀子・太刀や小児墓に伴う鳩笛・土人形等の玩具類が。九州でも六道銭・煙管・碗・皿・小杯の他に数珠・鉢・毛抜き・剃刀・櫛・紅皿・土人形など多様な副葬品がみられる。これら県外の事例については、上級武士層の副葬品も含まれているため直接的な比較はし難い。しかし六道銭と煙管のみ、或いは、六道銭・煙管・飯碗・酒杯の基本的な組み合せからなる副葬形態は、土佐の風俗的な側面も示しているともみえ興味深い。

## おわりに

今回は小高坂山墓地の成果に県下の近世墓報告事例を加え、今までの近世墓資料の集約を行った。土佐の近世墓の考古学的な発掘調査報告がなされた1995年の『小籠遺跡I』以来、その報告数は序々に増えているが、まだ数遺跡に留まり、県下の近世墓の実態を明らかにできる段階には至っていない。始めに触れた様に、近世墓は法制的・習俗的な面での制約から、墓地の開発化と移転に際してもなかなか発掘調査に至り得ない。特に今回の高知市三の丸の小高坂山墓地の移転に際しても、500基以上に及ぶ近世墓のうち、その大部分が未調査のまま移転されるという状況であり、まさに近世墓調査の向かう厳しい局面を浮き彫りにしたともいえる。考古資料としての近世墓の重要性を再認識し、近世遺跡及び近世墓の記録保存への一層の取り組みを望むとともに、今後の資料集積に期待したい。

#### 〔謝辞〕

本稿をまとめにあたっては、出土銭貨の鑑定について泉幸代氏、県下の近世墓について岡本桂典・出原恵三・吉成承三氏より御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

#### 〔註〕

- 1) 豊谷浩之「大坂の近世墓」『関西近世考古学研究VI』1998年
- 2) 埋葬形態の地域差や階層差については『鎌袋』文政5年の項に「同夜仮葬仕候様被仰付ニ付当村松ノ前山ニ葬ル当地之風儀舊薄葬ニ而身棺抜群宜家座棺其他は複棺ニテ葬ル由此複棺之製ワツカ長三尺計之第二而足をかゝめテ横ニ寝る様ニ納ル由也仍而別ニ厚キ棺材をモトメ臥棺ヲ製ス尤衣衾等持合ノモノヲ用ル故高知ニ而作ル棺ヨリモ大キク且頭ノ方ヲ高ク作ル 槍制如此ツクル本式ナリ」との記述がある。上記述は著者である楠瀬大枝が親族の葬儀のために高知城下から須崎の津浦に向かった時、村の葬儀について見聞した内容を表したものである。
- 3) 桜木晋一「前畠遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭」「前畠遺跡－第6分冊」鹿児島県教育委員会1990年
- 4) 桜木晋一「前畠遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭」「前畠遺跡－第6分冊」鹿児島県教育委員会1990年
- 5) 鈴木公雄「出土六道銭の組合わせからみた江戸時代前期の銅錢流通」「社会経済史学 第53巻第6号」1988年

#### 〔参考文献〕

- 泉幸代「小籠遺跡出土の六道銭について」「小籠遺跡I」高知県埋蔵文化財センター 1995年  
出原恵三「近世墓について」「小籠遺跡I」高知県埋蔵文化財センター 1995年  
岡本桂典「土佐十和村の墓標について」「立正史学 第59号」1986年  
桜木晋一「九州における近世墓研究と六道銭」「関西近世考古学研究VI」1998年  
加納梓「副葬品について」「自證院遺跡」東京都新宿区教育委員会 1987年  
出原恵三・泉幸代・藤方正治「小籠遺跡I」高知県埋蔵文化財センター 1995年  
吉成承三・大崎文彦・松田知彦「姫野々土居跡」葉山村教育委員会2000年  
松村信博・山本純代「奥谷南遺跡I」高知県埋蔵文化財センター 1999年  
出原恵三「林田遺跡II」高知県埋蔵文化財センター 2002年  
泉幸代・浜田恵三・出原恵三・宮地将介「B 4区」「E 2区」「F 5区」「田村遺跡群II」高知県埋蔵文化財センター 2004年  
『土佐藩法制史料叢書』「里正之部卷ノ一」高知県立図書館1982年

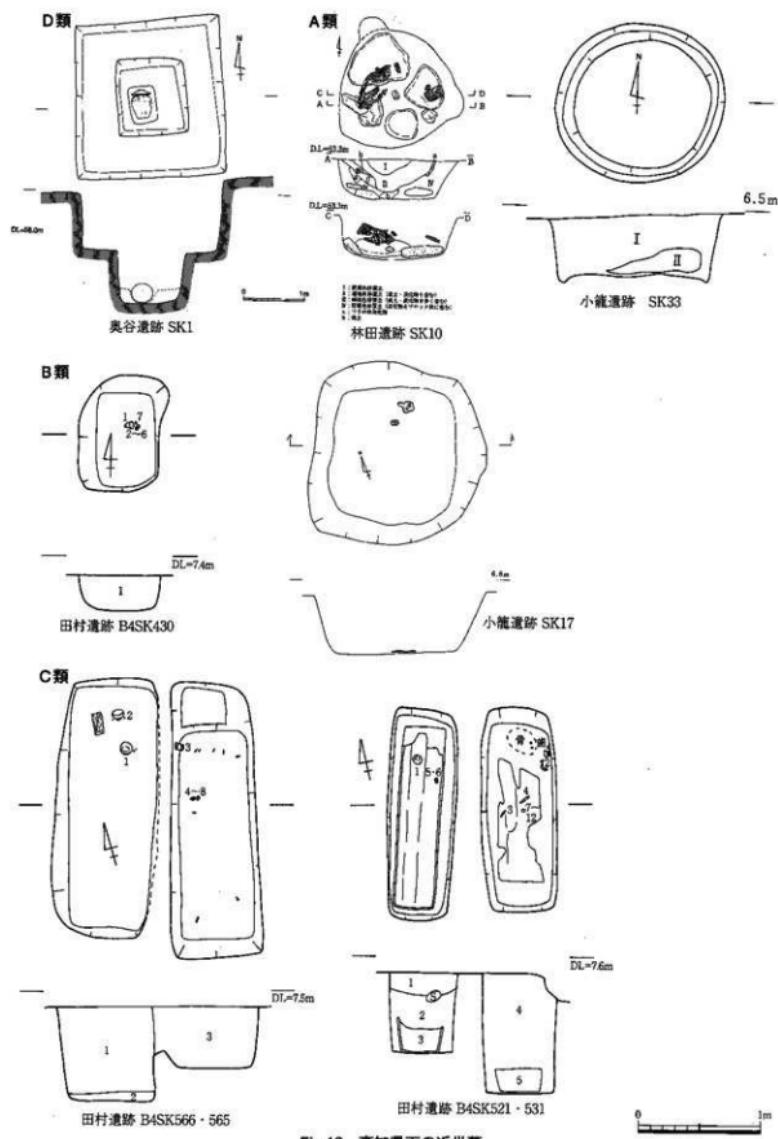


Fig.13 高知県下の近世墓

表5 近世墓坑一覧

遺跡名	遺構番号	時期分類	年代	形態分類	形態・構造	平面規模(cm)	副葬品					他の出土遺物	特徴(A~S夫婦系)	年代推定の根拠・備考	
							六酒器(枚)	腰帶	鏡	小杯	覆口	皿	その他		
小高坂山 森田家墓所	SK1	Ⅱ	18C前半	C	長方形	180×55	6	○						人骨 A(男)	墓碑銘1715年
小高坂山 森田家墓所	SK2	Ⅲ	18C前半	C	長方形	144×46								A(女)	没年1738年
小高坂山 森田家墓所	SK3	Ⅲ	18C前半	C	長方形	170×50	6	○						鉢、人骨 B(男)	墓碑銘1744年
小高坂山 森田家墓所	SK4	Ⅲ	18C前半	C	長方形	158×50		○		○				刀 B(女)	墓碑銘1745年
小高坂山 森田家墓所	SK5		不明	A	円形	65×60								劍	
小高坂山 森田家墓所	SK6		18C以降	C	長方形	190×53	6	○							新寛永(1697年以降)
小高坂山 森田家墓所	SK7	Ⅲ	19C前半	C	長方形	約200×60								C(男)	墓碑銘1803年
小高坂山 森田家墓所	SK8	Ⅲ	19C前半	C	長方形	185×44	3	○						C(女)	没年1805年
小高坂山 森田家墓所	SK9	Ⅲ	19C前半以降	A'	小型円形	46×46	4							腰、棺 蓋、人骨	幼耳馬、妻棺 切り合い関係
小高坂山 森田家墓所	SK10	Ⅲ	18C前半	A	円形	100×72・ 70×60									墓標銘1725年
小高坂山 森田家墓所	SK11	Ⅲ	18C後半	C	美方形・美化物多	-		○						D(男)	墓碑銘1779年
小高坂山 森田家墓所	SK12	Ⅲ	18C後半	C	美方形・美化物多	-		○						D(女)	墓碑銘1782年
小高坂山 八郎兵衛 曾我家墓所	SK13	Ⅲ	18C前半	C	美方形・美化物多	-		○						E(男)	墓標銘1738年
小高坂山 八郎兵衛 曾我家墓所	SK14	Ⅲ	18C中葉	C	長方形・美化物多	-								F(女)	墓標銘1759年
小高坂山 八郎兵衛 曾我家墓所	SK15	Ⅲ	18C中葉	C	長方形・美化物多	-								G(女)	墓標銘1759年
小高坂山 三の丸寺地 墓所	I	17C後半	Cか	長方形少・ 美化物多・ 漆吸等を稍 両面に埋め る	-	不明		色松 組器 ○						木棺・ 人骨	墓標銘1661年
奥谷南	SK1	I	17C中葉	D	方形・底部 二段階	蓋下部120 ×120								腰帯、 鏡(複 数)、 人骨	墓標銘1652年、 乳頭窓・腰椎
奥谷南	SK2	I	17C中葉	D	美方形・美 第二段階	蓋下部180 ×80									SK1との位置関 係
奥谷南	SK3	II	18C前半	C	長方形	200×80	6(布 付)		○					刀	
瀬野今上原	SK9	I	17C後半	A	円形	100×100								土器器 人骨・ 盾	SK10・11との位 置関係
能野今上原	SK11	I	17C後半	A	円形	90×80		○	○					F	能野今上原
能野今上原	SK10	I	17C中葉	A	円形	70×70			○					F	能野今上原
小堀I区	SK1	17C末~18C	A	円形	140×140									位臵関係	
小堀I区	SK13	17C末~18C	A	円形(縫痕 有り)	170×170			○						G	肥前陶器
小堀I区	SK15	17C末~18C	B	椭丸長方形・ 床面に縫痕	208×194									G	位臵関係
小堀I区	SK33	18C	A	円形(縫痕 有り)	136×130	2								人骨	新寛永(1697年 以降)
小堀I区	SK34	17C末~18C	A	不整形・床 面に粘土と 繊維	210×165									H	位臵関係
小堀I区	SK23	I~ II	17C後半~ 18C前半	A	不整形	110×170								H	肥前今上原
小堀I区	SK10	17C末~18C	A	椭円形	220×150										位臵関係
小堀I区	SK12	17C末~18C	B	椭丸長方形	216×104										位臵関係
小堀I区	SK15	17C末~18C	B	椭丸長方形	210×122										位臵関係
小堀I区	SK18	17C末~18C	B	椭丸長方形・ 床面に縫痕	208×194										位臵関係
小堀I区	SK22	17C末~18C	B	椭丸長方形	208×190										位臵関係
小堀I区	SK19	17C末~18C	B	不整形	154×146									I	位臵関係
小堀I区	SK17	18C	B	椭丸長方形	150×140	5								木棺、 盾	不旧手袋(1726 年以前)・位臵関 係

表5 近世墓坑一覧

遺跡名	遺構番号	時期 分類	年代	形態・構造	平面輪廓 (cm)	副葬品						他の所 上遺物	特徴 (A-S 大項)	年代確定の 根拠・参考	
						六道鏡 (枚)	腰带	鏡	小杯	口筒	皿				
小瓶I区	SK20	17C末~18C	C	長方形	160×66							唐津系 灰陶馬		位置関係	
小瓶I区	SK26	17C末~18C	C	長方形	248×102							肥前系 灰陶器		位置関係	
小瓶I区	SK27	17C末~18C	B	長方形	194×106									位元關係	
小瓶I区	SK28	17C末~18C	B	長方形	194×118									位元關係	
小瓶I区	SK29	17C末~18C	B	長方形	178×90									位元關係	
小瓶I区	SK30	17C末~18C	B	長方形	168×112									位元關係	
小瓶I区	SK31	17C末~18C	B	長方形	160×138									位元關係	
小瓶I区	SK32	17C末~18C	B	長方形	不明×106									位元關係	
小瓶I区	SK34	18C	C	長方形	140×60	4枚 漆室 通宝						木棺、 軒、人骨		新見水(1697年 以降)・位元關係	
田村B1区	B1SK118	Ⅲ	19C中葉	C	長方形	186×56		○	○			木棺、 軒	J	鹿茶山黒磁器	
田村B1区	B1SK117	Ⅲ	19C中葉	C	長方形	180×64	-	-	-	-	-		J	位置関係・削平 され遺物小品	
田村B1区	B1SK144	Ⅲ	19C前半~中葉	C	長方形	168×60	1	○	○			人骨、 軒		肥前系船谷	
田村B1区	B1SK152	Ⅲ	19C中葉か	C	長方形	177×44	-	-	-	-	-			床面まで削平さ れ遺物不明	
田村B4区	B4SK430	I	17C後半	B	長方形	96×66	5		○				K	肥前系船谷	
田村B4区	B4SK530	I	17C後半	C	長方形	186×72	6	○				かわら け	K	SK430との位元 關係	
田村B4区	B4SK565	I	17C後半	C	長方形	227×70	6					かわら け	L	SK566との位元 關係	
田村B4区	B4SK566	I	17C後半	C	長方形	212×85			○			木棺、 軒	L	肥前系船谷	
田村B4区	B4SK564	II	17C末~18C 前半	C	長方形	178×116	4					木棺、 軒	M	SK566との位元 關係・新見水 (1697年以降)	
田村B4区	B4SK566	II	17C末~18C 前半	C	長方形	192×84	2(布 着付)					かわら け	木棺	M	SK566との位元 關係・新見水 (1697年以降)
田村B4区	B4SK517	Ⅲ	19C	C	長方形	183×52	5	○	○	○		人骨	N	肥前系船谷	
田村B4区	B4SK522	Ⅲ	19C	C	長方形	170×41			○			軒、人骨	N	肥前系船谷	
田村B4区	B4SK520	Ⅲ	19C	C	長方形	170×54	5~6		○			軒、垂		肥前系船谷	
田村B4区	B4SK531	Ⅲ	18C後半~ 19C	C	長方形	168×62	6	○	○			木棺、 軒、人骨	O	京都市系船谷、 肥前系船谷	
田村B4区	B4SK521	Ⅲ	19C	C	長方形	171×57	5	○	○			木棺	O	肥前系船谷	
田村B4区	B4SK523	18C	C	長方形	168×50		○	○			木棺、 軒、人骨	P	肥前系船谷		
田村B4区	B4SK536	18C	C	長方形	190×38	-	-	-	-	-			P	床面まで削平さ れ遺物不明	
田村B4区	B4SK529	II	18C末~19C	C	長方形	172×60	5~6	○	○	○		木棺、 軒	Q	鹿茶山黒磁器・ 漆室	
田村B4区	B4SK525	II	19C	C	長方形	168×48	6	○	○			木棺、 軒、人骨	Q	肥前系船谷	
田村B4区	B4SK528	II	19C	C	長方形	189×50		○				軒	R	西辺墓坑との位 置関係	
田村B4区	B4SK527	II	19C	C	長方形	142×56	5	○	○	○		軒	R	鹿茶山黒磁器	
田村B4区	B4SK534	18~19C	B'	長方形	68×44							幼兒墓			
田村B4区	B4SK535	Ⅲ	19C中葉	C	長方形	188×59	2	○	○	○				鹿茶山黒磁器	
田村B4区	B4SK538	不明	C	長方形	138×41	-	-	-	-	-				床面まで削平さ れ遺物不明	
田村B4区	E2SK268	Ⅲ	19C	C	長方形	170×48			○			木棺、 軒	S	肥前系船谷	
田村E2区	E2SK270	Ⅲ	19C	C	長方形	170×48			○				S	在地系船谷	
田村P5区	FSSK 5001	18C以降	B	灰長方形	139×98	6						木棺、 軒、垂		新見水(1697年 以降)	
田村P5区	FSSK 5002	18C	A	円形	87×69	7~8枚 純金も 含む				○				肥前系船谷、 鉄板(1750年以降)	
田村P5区	FSSK 5003	19C	C	長方形	187×61	14枚 純金も 含む	○					かわら け		銀質・鉄板(1750 年以降)	
田村P5区	FSSK 6004	18C以降	A	円形	107×105	1								新見水(1697年 以降)	

表5 近世墓坑一覧

遺跡名	遺構番号	時期 分類	年代	形態 分類	形態・構造	平均長幅 (cm)	副葬品					他の出土遺物	特徴 (A~S 夫婦墓)	年代推定の 根拠・参考	
							六通鏡 (枚)	鍵管	鏡	小杯	鏡口	皿	その他		
田村PSK 5006			不明	A	楕円形										
田村PSK 5013			18C以前	C	長方形	185×70	7	○				かわら け	木棺	新発水(1697年 以前)	
田村PSK 5014			18C	C	長方形	181×56			○					木棺、 釘	肥前磁器
田村PSK 5015		Ⅲ	18C前半	B	長方形	112×62	5		○					木棺	肥前磁器兼付
田村PSK 5016A			18C以降	C	長方形	不測	6								新発水(1697年 以降)
田村PSK 5016B			18C以降	C	長方形	不測	4								新発水(1697年 以降)
田村PSK 5017			18C以降	C	長方形	123×52	3						釘	新発水(1697年 以降)	
田村PSK 5018			不明	C	長方形	180×59									
田村PSK 5021			不明	A	楕円形	127×92									
田村PSK 5023		Ⅲ	19C	C	長方形	186×51				○				在地系陶器	
田村PSK 5024			不明	C	長方形	152×68									
田村PSK 5026		Ⅲ	18C後半	C	長方形	202×53	不明、 鉄錠合 む	○	○					肥前磁器・鉄錠 (1799年以降)	
田村PSK 5027		Ⅲ	19C	C	長方形	178×50	5			○					肥前系陶器
田村PSK 5028		Ⅲ	19C	C	長方形	138×57	1 鉄錠			○					肥前系陶器
田村PSK 5029			不明	C	長方形	不測									
田村PSK 5030		Ⅲ	18C後半	C	長方形	144×59	5 鉄錠	○	○				釘	京都系陶器	
田村PSK 5031			18~19C	C	長方形	201×54				○			釘	在地系陶器	
田村PSK 5033			18~19C	C	長方形	166×66	6	○	○	○			木棺、 釘	在地系陶器	
田村PSK 5035		Ⅲ	19C	-	不明	不明	6+鉄 錠			○				肥前系陶器	
田村PSK 5036			不明	-	不明	不明									
田村PSK 5045		18C	B	長方形	124×68	6							釘	貴賤組み合せか ら年代推定	
林田	SK10		不明	A	円形・椎土 含・床面に 大型鉄錠	100×100	5						木棺・ 鉄釘		

表6-1 I期(17C後半)

	古窓水	文鏡	新窓水	鉄鏡	不明、その他	計	副葬年代
田村B4SK430	6					6	17C後半
田村B4SK530	6					6	17C後半
田村B4SK565	6					6	17C後半～18C前半
計	18 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	18 (100%)	

表6-2 II期(18C前半)

	古窓水	文鏡	新窓水	鉄鏡	不明、その他	計	副葬年代
森田SK1	4		2			6	18C前葉
森田SK3	3		3			6	18C前半
奥谷南SK3	1	2	3			6	18C前半
田村B4SK554			4			4	17C末～18C前半
田村B4SK556			2			2	17C末～18C前半
田村FSSK5002			5	2		7	18C前半
田村FSSK5015		1	4			5	18C前半
計	8 (22%)	3 (8%)	23 (64%)	2 (6%)	0 (0%)	36 (100%)	

表6-3 III期(18C後半～19C)

	古窓水	文鏡	新窓水	鉄鏡	不明、その他	計	副葬年代
田村FSSK5026			3	2～3		5～6	18C中葉～後半
田村FSSK5030				5		5	18C後半
田村FSSK5003	1		13			14	18C中葉以降
田村B4SK535	2					2	19C中葉
田村FSSK5035	3		3			6	19C
田村FSSK5027	2		3			5	19C
森田SK8	1	2				3	19C前葉
森田SK9		2		1	1	4	19C
田村B1SK144			1			1	19C
田村B4SK521			5			5	19C
田村B4SK527			6			6	19C
田村B4SK525			5	1		6	19C
田村B4SK531			5	1		6	18C後葉～19C
田村B4SK517		2	3			5	19C
田村B4SK520				5～6		5～6	19C
田村B4SK528				6		6	19C
田村FSSK5028				1		1	19C
計	8 (9%)	1 (1%)	50 (58%)	約26 (31%)	1 (1%)	約86 (100%)	

表6-4 IV～V期

	古窓水	文鏡	新窓水	鉄鏡	不明、その他	計	副葬年代
田村FSSK5015A	3	1	1		1	6	18C以降
小鹿SK34	1	1	1		永楽造室	4	18C以降
田村FSSK5001	2		4			6	18C
田村FSSK5013	1		6			7	18C以降
田村FSSK5017	1		2			3	18C以降
田村FSSK5033	1		5			7	18C以降
田村FSSK5045	2		4			6	18C
小鹿SK17		2	3			5	18C以降
田村FSSK5004		1				1	18C以降
田村FSSK5016B		1	3			4	18C以降
森出SK6			6			6	18C以降
小鹿SK33			2			2	18C以降
計	11 (19%)	6 (11%)	38 (67%)	0 (0%)	2 (6%)	57 (100%)	

# 写 真 図 版



I 区全景（西より）



墓標 A



墓標 E (前)・C (後)



墓標 D



墓標 B



S K 4 遺物出土状況



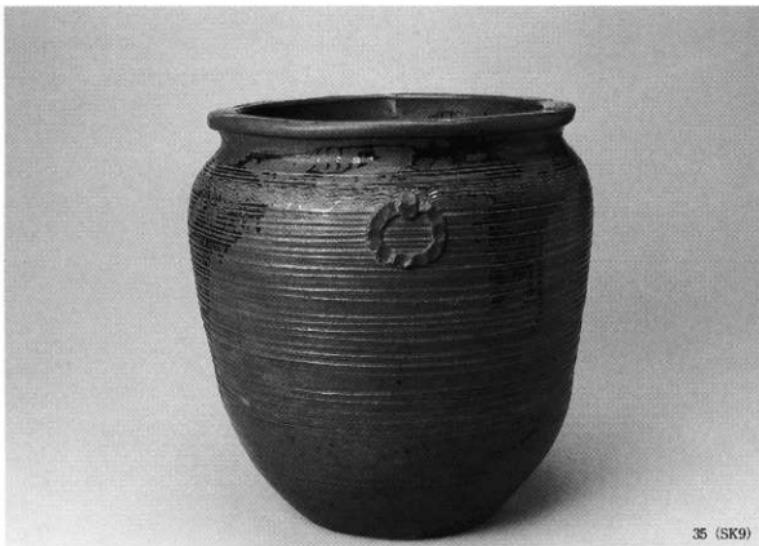
S K 1 六道錢・人骨出土状況



SK 9 墓棺出土状況（東より）



SK 9 出土人骨



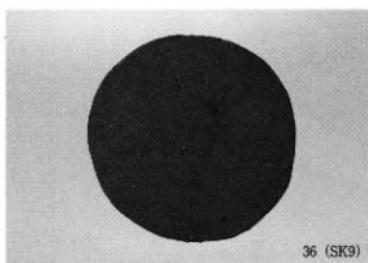
35 (SK9)



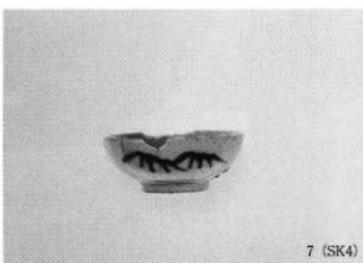
35



35

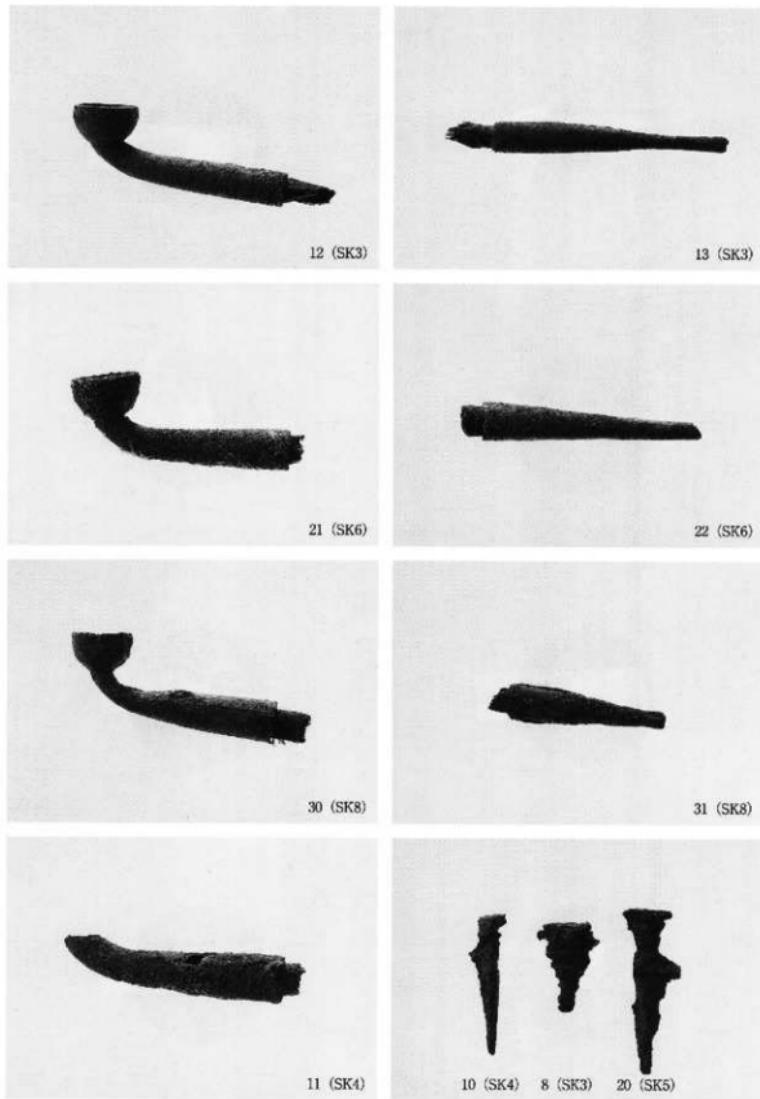


36 (SK9)



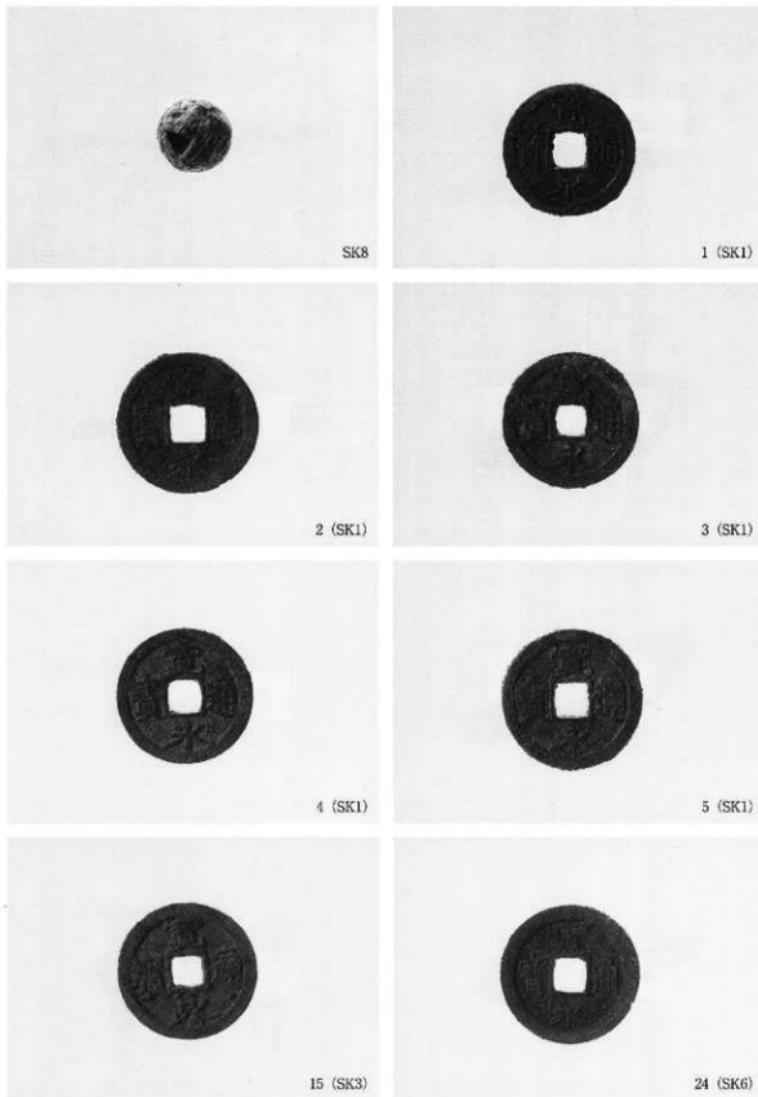
7 (SK4)

S K 4 · 9 出土遺物



S K 3 ~ 6 · 8 出土遺物

PL. 6



S K 1 · 3 · 6 · 8 出土遺物

# 高知市森田久右衛門墓所出土の近世幼児骨

松下孝幸

【キーワード】：高知県、近世人骨、幼児骨

## はじめに

高知県高知市三ノ丸前山に所在する森田久右衛門墓所の試掘調査が2003年（平成15年）3月におこなわれ、1基の壺棺から比較的保存状態良好な人骨が1体検出された。試掘調査がおこなわれた森田家は近世土佐藩窯である尾戸焼の製作を代々にわたって勤めており、この墓所には初代陶工森田久右衛門や第4代陶工の森田弥源次の他10基の近世墓が確認されている。

人骨が検出された墓壙は第4代陶工森田弥源次の妻の墓壙を切る状況で検出されており、墓壙内には高さ33.6cmの鉄釉陶器壺が埋納されており、その中から保存良好な1歳半の幼児骨が検出された。この幼児骨には古銭4枚が副葬されており、金箔状の細片も認められている。

今回検出されたのは幼児骨のみであったが、四肢骨の保存状態が良好であり、四肢骨の計測をおこなうことができたし、年齢も推定することが可能だったので、その結果を報告しておきたい。

## 資料

今回人骨が出土した墓坑（SK9）は平面プランが円形で、径46cm、深さ46cmで、この墓坑内には脛部最大径32cm、高さ33.6cmの鉄釉陶器壺が埋納されており、この壺棺から人骨が1体検出された。この人骨は所見の項で詳述しているように1歳半ぐらいの幼児骨で、共伴した古銭や壺の考古学的所見から、18世紀末から19世紀前葉頃の近世人骨と推測されている。

計測方法は、基本的にはMartin-Saller（1957）によったが、一部は筆者が独自に項目を付け加えた。なお、年齢区分は表1に示すとおりである。

表1 年齢区分（Table 1. Division of age）

年齢区分	年	齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小兒	6歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

\* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

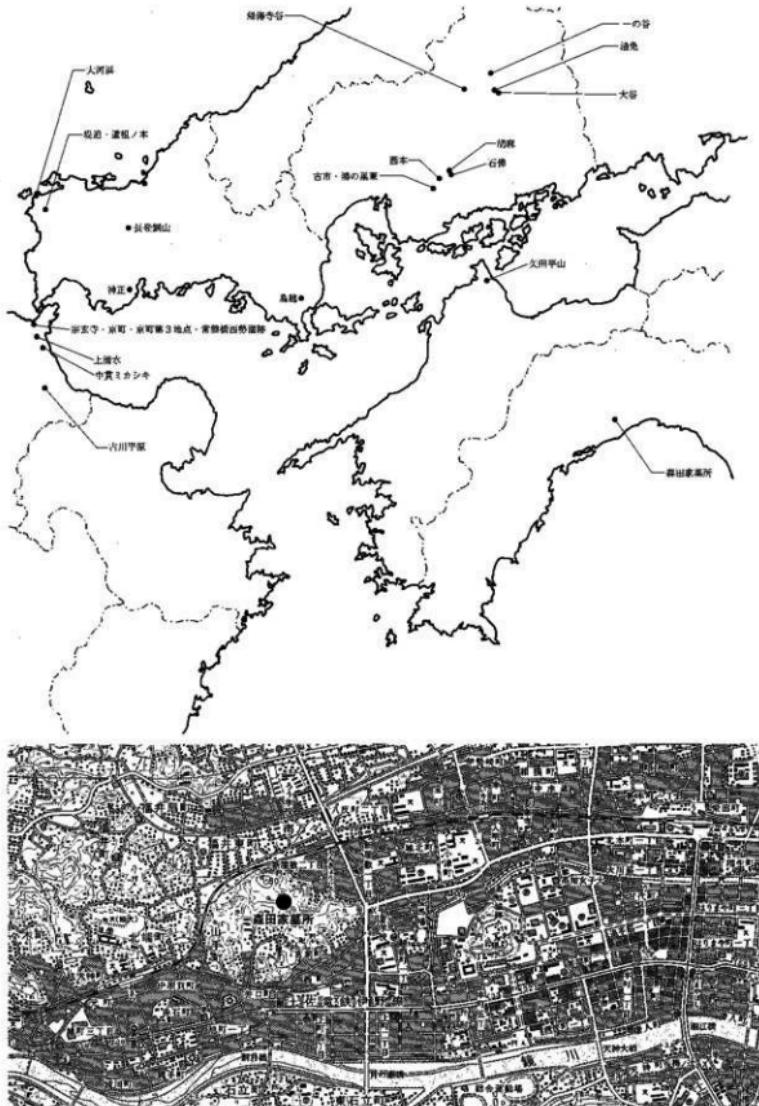


図1 遺跡の位置 (1/25,000)  
 (Fig. 1 Location of the graves of the Morita family, Kochi City, Kochi Prefecture)

## 所見

残存部分は図2に示し、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

### 1. 頭蓋

頭蓋の保存状態は四肢骨に比べると良くない。

#### (1) 脳頭蓋

大部分が失われており、残っていたのは右側頭頂骨、右側側頭骨などである。

#### (2) 頤面頭蓋

顎面頭蓋も右側半が残っていたに過ぎない。眼窩はかなり大きく、上顎高は41mmで、かなり低い。下顎骨は左側の下顎枝が欠損している以外はよく残っている。

### 2. 齒

上顎骨と下顎骨には乳歯が釘植している。残存歯と歯槽の状態を歯式で示した。

mam1 ○ iz1	iz1 ○ mam2
mam1 ○ iz1	iz1 ○ mam2

(/ : 不明 (破損) ○ : 歯槽開存 ● : 歯槽閉鎖)

下顎の左側第一乳臼歯と上顎左側第一乳臼歯は萌出しているが、下顎の右側第一乳臼歯と第二乳臼歯、上顎の右側の第一乳臼歯と第二乳臼歯および上顎の左側第二乳臼歯はまだ萌出していない。また、乳犬歯は1本も遺存していないかった。また、板状の上顎左側の第二大臼歯冠が残っていた。

### 3. 四肢骨

#### (1) 上肢骨

上肢骨は、肩甲骨（左右）、鎖骨（左右）、上腕骨（左右）、橈骨（左右）、尺骨（左右）が残存していたが、橈骨と尺骨の保存状態は他の上肢骨に比べてあまりよくない。

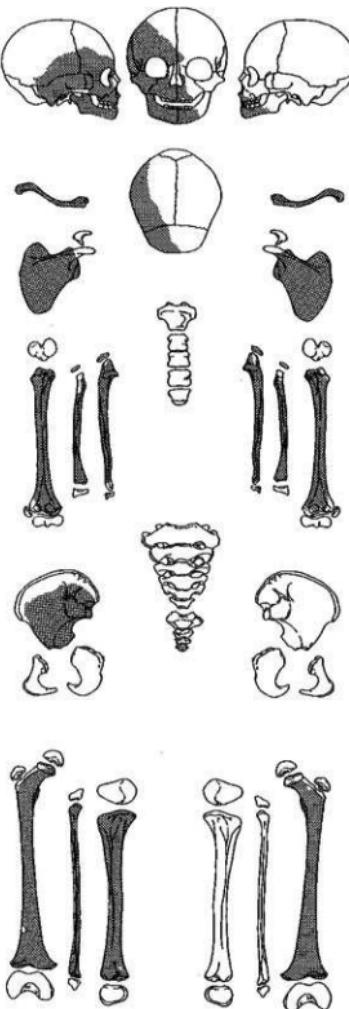


図2 森田家墓所SK-9 (幼児)

人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 2 Regions of preservation of the skeleton.  
Shaded areas are preserved.)

## (2) 下肢骨

下肢骨は、右側の腸骨、左右の大腿骨、右側の脛骨と右側の腓骨が残存していたが、左側の腸骨、左右の坐骨と恥骨、左側の脛骨と腓骨がまったく残存していなかった。

## 4. 骨幹骨

椎骨は大部分の椎弓と18個の椎体、肋骨は23本（12番の肋骨が1本欠損）残っていた。

## 5. 年齢の推定

まず、乳歯の萌出状態から年齢を推定してみたい。上下両顎の左側第一乳臼歯はすでに萌出している。藤田によれば、上顎の第一乳臼歯の萌出時期の平均値は男子で530日、女子で497日で、下顎の場合は男子で531日、女子で521日である。

次いで、四肢骨の長さで年齢を推定してみると、表2は上腕骨の計測値の比較表であるが、骨体最大長は15歳と推定されている山口県豊浦郡豊北町の大河浜2号人骨とほとんど大差なく、骨体周などの計測値もほぼ一致している。表3は大腿骨の比較表である。本例では骨体最大長が計測できないが、復元値を求めてみると約124mm程度になり、この値は大河浜2号人骨の121mmに近い。その他中央周などの計測値も大河浜2号人骨の計測値にかなり近い。表4は脛骨の比較表である。表4からも各計測値が大河浜2号人骨に近いことがわかる。表にはしていないが、橈骨や尺骨の計測値も大河浜2号人骨の計測値に近く、本例の四肢骨は各骨とも大河浜2号人骨に酷似している。四肢骨ばかりではなく、乳歯の萌出状況も本例に近く、本例は全身骨でこの大河浜2号人骨に近いのである。従って本例の年齢はこの大河浜2号人骨とはほぼ同じ位と考えて大過ないものと思われ、年齢を15歳前後と推定した。

表2 上腕骨計測値 (Table 2. Comparison of measurements and indices of humeri)

	京町 KB-7	京町 DB-244-2	森田家墓所 SK-9	大河浜 2	京町 KB-312	京町 KB-281	京町 KB-303
9ヶ月	15歳	15歳		15歳	2歳	3歳	3歳
近世	近世	近世	近世	近世	近世	近世	近世
福岡県	福岡県	高知県	山口県	福岡県	福岡県	福岡県	福岡県
1. 骨体最大長	(右) 88	-	101	100	-	-	-
	(左) 89	-	-	100	-	118	125
2. 骨体中央最大径	(右) 9	12	9	10	-	-	-
	(左) 9	12	10	10	12	13	11
3. 骨体中央最小径	(右) 7	9	8	8	-	-	-
	(左) 7	9	7	8	11	11	10
4. 骨体中央周	(右) 26	35	29	30	-	-	-
	(左) 26	35	29	30	38	40	35
5. 骨体上端幅	(右) 20	-	19	17	-	-	-
	(左) 21	-	-	17	25	25	24
6. 骨体下端幅	(右) 23	24	-	22	-	-	28
	(左) 24	-	-	-	-	29	29
7. 骨体最小周	(右) 26	31	28	28	-	-	-
	(左) 26	32	28	29	-	38	34
3/2 骨体中央断面示数	(右) 77.78	75.00	88.89	80.00	-	-	-
	(左) 77.78	75.00	70.00	80.00	91.67	84.62	90.91
7/1 長厚示数	(右) 29.55	-	27.72	28.00	-	-	-
	(左) 29.21	-	-	29.00	-	32.20	27.20

表3 大腿骨計測値 (mm) (Table 3. Comparison of measurements and indices of femora)

	京町 DB-274	京町 KB-123	京町 DB-244-2	森田家墓所 SK-9	大河浜 2	京町 KB-182	京町 KB-312
	1歳 近世 福岡県	1歳 近世 福岡県	15歳 近世 福岡県	近世 高知県	15歳 近世 山口県	15歳~2歳 近世 福岡県	2歳 近世 福岡県
1. 骨体最大長	(右) -	(左) -	-	135	-	121 (117)	-
2. 骨体中央横径	(右) 10	(左) -	-	12	9	10 (117)	12
3. 骨体中央矢状径	(右) 9	(左) -	11	-	9	10 12	12
4. 骨体中央周	(右) 31	(左) -	-	37	30	32 37	39
5. 骨体上横径	(右) 13	(左) -	-	14	12	13 16	15
6. 骨体上矢状径	(右) 11	(左) -	-	12	10	10 13	13
7. 骨体上端幅	(右) 27	(左) -	-	32	-	28 28	34
8. 骨体下端幅	(右) -	(左) -	-	40	32	32 -	34
4/1 長厚示数	(右) -	(左) -	-	27.41	-	26.45 (31.62)	-
3/2 骨体中央断面示数	(右) 90.00	(左) -	81.82	91.67	88.89	90.00 (30.77)	91.67
6/5 上骨体断面示数	(右) 84.62	(左) -	71.43	85.71	83.33	76.92 81.25	86.67
			-	-	75.00	76.92 73.33	86.67

表4 膝骨計測値 (mm) (Table 4. Comparison of measurements and indices of tibiae)

	京町 KB-123	京町 DB-302-2	京町 DB-244-2	森田家墓所 SK-9	大河浜 2	京町 KB-182	京町 KB-312
	1歳 近世 福岡県	1~15歳 近世 福岡県	15歳 近世 福岡県	近世 高知県	15歳 近世 山口県	15歳~2歳 近世 福岡県	2歳 近世 福岡県
1. 骨体最大長	(右) -	(左) -	-	-	102	100 -	-
2. 骨体中央横径	(右) -	(左) 9	-	11	8	8 10	11
3. 骨体中央最大径	(右) -	(左) 10	-	-	-	8 10	11
4. 骨体中央周	(右) -	(左) 10	10	-	-	9 11	12
5. 骨体上端幅	(右) -	(左) 31	30	-	-	28 33	37
6. 骨体下端幅	(右) -	(左) -	-	27	24	- 24	-
7. 骨体最小周	(右) -	(左) 31	-	-	-	- -	21
7/1 長厚示数	(右) -	(左) -	-	-	27.45	28.00 -	-
2/3 骨体中央断面示数	(右) -	(左) 90.00	100.00	100.00	88.89	88.89 88.89	90.91 90.91
			-	-	-	- 91.67	91.67

## 要 約

高知県高知市三ノ丸前山にある森田久右衛門墓所の2003年（平成15年）3月におこなわれた試掘調査によって、1基の壺棺から比較的保存状態良好な人骨が1体検出された。頭蓋の保存状態は悪かったが、四肢骨や軸幹骨の保存状態は比較的良好で、計測や観察が可能で、年齢も推定することができた。人類学的所見は次のとおりである。

1. 試掘調査で出土した人骨は1体のみで、これは墓坑（SK9）に納められていた壺棺（鉄釉陶器壺）から検出された。
2. 本人骨には古銭4枚が副葬されており、また金箔状の細片も認められている。
3. 本人骨は18世紀末から19世紀前葉頃に埋葬された人骨と推測されている。
4. ほぼ全身の骨が残っていたが、頭蓋は右側の一部しか残っていなかった。また、左側腸骨、左右の坐骨、恥骨および左側の脛骨と腓骨が遺存していなかった。
5. 乳歯の萌出状態と四肢骨の大きさから、本被葬者は15歳前後の幼児と考えられる。
6. 幼小児骨から成人になってからの特徴を推測することは困難であると一般的に考えられているが、弥生時代人骨の場合は、成人にみられる地域差が幼小児骨にすでに認められることから、ある程度の予想はできそうである。本例はかなり低顎で、眼窩がかなり大きい特徴が認められたが、このような特徴は子供に共通してみられる特徴なので、そのまま成人の特徴とするわけにはいかない。今後高知県の近世人骨の特徴がわかつてくれれば、本例との関連などについても言及ができるかもしれない。

### 〔謝辞〕

《調査するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた高知県埋蔵文化財センター、高知市教育委員会生涯学習課の皆様方に感謝致します。》

### 〔参考文献〕

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸・他、1980a : 熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塙塙古墳（熊本県文化財調査報告46）付：1-17
3. 松下孝幸・他、1980b : 熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺I（熊本県文化財調査報告45）：61-68
4. 松下孝幸、1981 : 鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（1））：215-228。
5. 松下孝幸・他、1982 : 宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報（III）：47-55。
6. 松下孝幸・他、1983 : 成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）：355-382。
7. 松下孝幸・他、1985 : 長崎県松浦市楼階田遺跡出土の近世人骨。楼階田遺跡-松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-（長崎県文化財調査報告書第76集）：191-196。
8. 松下孝幸・他、1992a : 北九州市上清水遺跡出土の近世人骨。上清水遺跡V区（奈良時代以降編）（北九州埋蔵文化財調査報告書第117集）：416-441。
9. 松下孝幸・他、1992b : 東広島市古市遺跡出土の近世人骨。西城第一土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発

- 掘調査報告書I（東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集）：105-126。
10. 松下孝幸、1993：北九州市京町遺跡出土の近世人骨。京町遺跡（北九州市文化財調査報告書第59集）：177-248。
  11. 松下孝幸・他、1994：山口県豊北町大河浜遺跡出土の人骨。大河浜遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第165集）：11-21。
  12. 松下孝幸、1995：北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨。宗玄寺跡（北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集）：502-542。
  13. 松下孝幸、1996a：北九州市普済院跡出土の近世人骨。折尾横穴群内普済院跡：95-121。
  14. 松下孝幸、1996b：長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土の近世人骨。頭ヶ島白浜遺跡（有川町文化財調査報告書第1集）：67-87。
  15. 松下孝幸、1997a：柳井市鳥越遺跡出土の近世人骨。鳥越遺跡発掘調査報告－和田山浄水場配水池建設に伴う発掘調査－：6-12。
  16. 松下孝幸、1997b：福岡県犀川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群（犀川町文化財調査報告書第5集）：82-98。
  17. 松下孝幸、1997c：広島県三次市帰海寺谷遺跡出土の近世人骨。県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第157集）：131-135。
  18. 松下孝幸、1998：山口県豊北町堤迫・道祖ノ本遺跡出土の近世人骨。堤迫・道祖ノ本遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第15集）：37-59。
  19. 松下孝幸、1998b：山口県阿知須町神正遺跡出土の近世人骨。赤追遺跡B地区発掘調査報告（阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集）：116-122。
  20. 松下孝幸、1998d：広島県庄原市一の谷第7号古墓出土の近世人骨。一の谷第6・7号古墳（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第170集）：47-50。
  21. 松下孝幸、1999a：北九州市常盤橋西勢溜り跡出土の近世・近代人骨。常盤橋西勢溜り跡（北九州市埋蔵文化財調査報告書第229集）：付論1-12。
  22. 松下孝幸、1999b：熊本県五木村頭地松本B遺跡出土の近世人骨。頭地松本B遺跡（2）（熊本県文化財調査報告第173集）：83-97。
  23. 松下孝幸、1999c：熊本県球磨郡錦町藏城遺跡出土の近世人骨。藏城遺跡（熊本県文化財調査報告第172集）：96-123。
  24. 松下孝幸、2000：愛媛県今治市矢田平山近世墓出土の近世人骨。阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡（一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書）（埋蔵文化財発掘調査報告書第88集）：271-318。
  25. 松下孝幸、2002：北九州市京町遺跡第3地点出土の近世人骨。北九州市京町遺跡第3地点（北九州市生往寺境内発掘調査報告）：99-140。

表5 顔面頭蓋 (mm、度) (Facial skeleton)

		森田家墓所 SK-9 1.5歳
40.	顎長	-
41.	側顎長	-
42.	下顎長	-
43.	上顎幅	-
45.	頬骨弓幅	-
46.	中顎幅	-
47.	顎高	-
48.	上顎高	41
47/45	顎示数(K)	-
48/45	上顎示数(K)	-
47/46	顎示数(V)	-
48/46	上顎示数(V)	-
40+45+47/3	顔面モルス	-
50.	前眼窩間幅	-
44.	両眼窩幅	-
50/44	眼窩間示数	-
51.	眼窩幅(右)	-
	(左)	-
52.	眼窩高(右)	-
	(左)	-
52/51	眼窩示数(右)	-
	(左)	-
54.	鼻幅	17
55.	鼻高	32
54/55	鼻示数	53.13
55(1).	梨状口高	-
56.	鼻骨長	-
57.	鼻骨最小幅	-
57(1).	鼻骨最大幅	-
60.	上顎歛槽長	-
61.	上顎歛槽幅	-
62.	口蓋長	-
63.	口蓋幅	-
64.	口蓋高	-
61/60	上顎歛槽示数	-
63/62	口蓋示数	-
64/63	口蓋高示数	-
72.	全側面角	-
73.	鼻側面角	-
74.	歛槽側面角	-

表6 下顎骨 (mm) (Mandibula)

		森田家墓所 SK-9 1.5歳
65.	下顎関節突起幅	-
65(1).	下顎筋突起幅	-
66.	下顎角幅	-
67.	前下顎幅	31
68.	下顎長	-
68(1).	下顎長	-
69.	オトガイ高	19
69(1).	下顎体高(右) (左)	-
69(2).	下顎体高(右) (左)	-
70.	枝高(右) (左)	33
70(1).	前枝高(右) (左)	33
70(2).	最小枝高(右) (左)	26
70(3).	下顎切痕高(右) (左)	7
71(1).	下顎切痕幅(右) (左)	22
71.	枝幅(右)	22
	(左)	-
71 a.	最小枝幅(右) (左)	22
79.	下顎枝角(右)	139
	(左)	-
66/65	下顎幅示数	-
68/65	幅長示数	-
68(1)/65	幅長示数	-
69(2)/69	下顎高示数(右) (左)	-
71/70	下顎枝示数(右) (左)	66.67
71 a/70(2)	下顎枝示数(右) (左)	84.62
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右) (左)	31.82

表7 鎖骨 (mm) (Clavica)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1.	最大長(右)	-
	(左)	59
2.	中央垂直径(右)	5
	(左)	5
3.	中央矢状径(右)	5
	(左)	5
4.	中央周(右)	16
	(左)	16
4/1	長厚示数(右)	-
	(左)	27.12
2/3	鎖骨断面示数(右)	100.00
	(左)	100.00

表9 楔骨 (mm) (Radius)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1.	骨体最大長(右)	-
	(左)	-
2.	骨体中央横径(右)	6
	(左)	6
3.	骨体中央矢状径(右)	5
	(左)	5
4.	骨体中央周(右)	18
	(左)	19
5.	骨体最小周(右)	18
	(左)	19
5/1	長厚示数(右)	-
	(左)	-
3/2	骨体中央断面示数(右)	83.33
	(左)	83.33

表8 上腕骨 (mm) (Humerus)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1.	骨体最大長(右)	101
	(左)	-
2.	骨体中央最大径(右)	9
	(左)	10
3.	骨体中央最小径(右)	8
	(左)	7
4.	骨体中央周(右)	29
	(左)	29
5.	骨体上端幅(右)	19
	(左)	-
6.	骨体下端幅(右)	-
	(左)	-
7.	骨体最小周(右)	28
	(左)	28
3/2	骨体中央断面示数(右)	88.89
	(左)	70.00
7/1	長厚示数(右)	27.72
	(左)	-

表10 尺骨 (mm) (Ulna)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1.	骨体最大長(右)	-
	(左)	(84)
2.	骨体中央最小径(右)	-
	(左)	5
3.	骨体中央最大径(右)	-
	(左)	7
4.	骨体中央周(右)	-
	(左)	19
5.	骨体最小周(右)	17
	(左)	16
5/1	長厚示数(右)	-
	(左)	(19.05)
2/3	骨体中央断面示数(右)	-
	(左)	71.43

表11 大腿骨 (mm) (Femur)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1.	骨体最大長(右) (左)	- -
2.	骨体中央横径(右) (左)	9 9
3.	骨体中央矢状径(右) (左)	8 8
4.	骨体中央周(右) (左)	30 30
5.	骨体上横径(右) (左)	12 12
6.	骨体上矢状径(右) (左)	10 9
7.	骨体上端幅(右) (左)	- -
8.	骨体下端幅(右) (左)	32 -
4/1	長厚示数(右) (左)	- -
3/2	骨体中央断面示数(右) (左)	88.89 88.89
6/5	上骨体断面示数(右) (左)	83.33 75.00

表12 胫骨 (mm) (Tibia)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1.	骨体最大長(右) (左)	102 -
2.	骨体中央横径(右) (左)	8 -
3.	骨体中央最大径(右) (左)	9 -
4.	骨体中央周(右) (左)	28 -
5.	骨体上端幅(右) (左)	24 -
6.	骨体下端幅(右) (左)	16 -
7.	骨体最小周(右) (左)	28 -
7/1	長厚示数(右) (左)	27.45 -
2/3	骨体中央断面示数(右) (左)	88.89 -

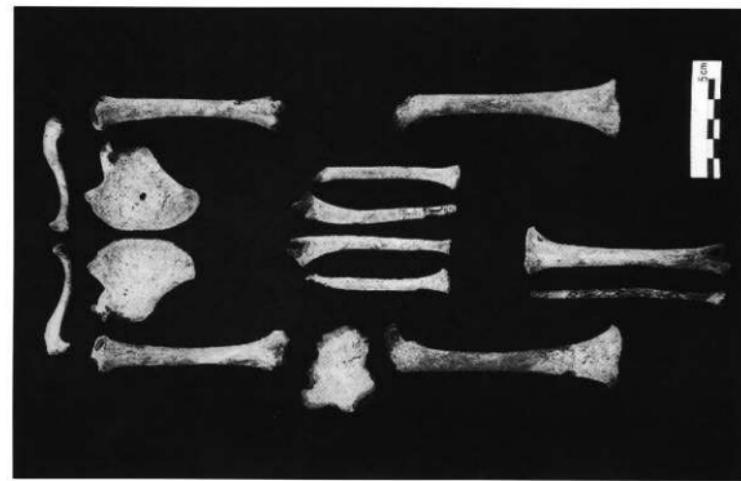
表13 腓骨 (mm) (Fibula)

		森田家墓所 SK-9 15歳
1	骨体最大長(右) (左)	98 -
2	骨体中央最大径(右) (左)	- -
3	骨体中央最小径(右) (左)	- -
4	骨体中央周(右) (左)	- -
5	骨体最小周(頸周)(右) (左)	- -
5/1	長厚示数(右) (左)	- -
3/2	中央断面示数(右) (左)	- -



頭蓋 (Skull)

森田家墓所 SK9 人骨 (1.5歳)  
(The Morita SK9, 1.5 years old)



四肢骨 (The limb bones)

報告書抄録

ふりがな	もりたきゅうえもんはしょおよびこだかさやまもりたけほしょ							
書名	森田久右衛門墓所 及び 小坂山森田家墓所							
副書名	墓地改葬に伴う確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知市文化財調査報告書							
シリーズ番号	26							
編著者名	田上 浩・浜田恵子							
編集機関	高知市教育委員会							
所在地	〒780-8571 高知県高知市本町4丁目3番30号 Tel.088-822-6394							
発行年月日	西暦 2004年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'	及		
もりたきゅうえもん 森田久右衛門 墓所	〒780-0923 こうちけん 高知県 こうちし 高知市 さんのもと 三ノ丸	39201	なし	33°	133°	20030303	約100m <sup>2</sup>	墓地の 改葬
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
森田久右衛門 墓所	近世墓	近世	墓	骨壺 六道鏡 煙管その他の副葬品			近世尾戸窯初代陶工 及びその一族の墓所 の形態の調査	

高知市文化財調査報告書第26集

## 森田久右衛門墓所及び小高坂山森田家墓所

—墓地改修に伴う埋蔵文化財確認調査報告書—

2004年3月

発 行 高知市教育委員会

〒780-0870 高知市本町4丁目3番30号

生涯学習課

電話 088-822-6394

印 刷 共和印刷株式会社